

# 三角縁神獣鏡の銘文字形分析

## —編年と製作工人—

雨宮 健祥

### 要旨

三角縁神獣鏡はその重要性ゆえ長い研究史があるが、製作工人に関して工人個人の特定は進んでおらず、編年にも曖昧な部分が多い。本論では、これまであまり注目されてこなかった銘文の字形が、工人差や時期差を反映していると考え、出現頻度の高い文字を中心に字形を分析した。その結果、「作」の字形タイプの変化から2段階編年が導かれ、その他7文字の字形タイプの纏まりから14人の工人が認められた。編年に関しては、既存の編年のこれまで曖昧であった部分の修正や細分を可能にした。工人に関しては、各工人の鏡に図像的特徴やその他の共通性が見られ、工人間には字形・図像的な繋がりも認められた。

### 1. はじめに

三角縁神獣鏡は、これまでの長い研究史の中で様々な観点から分析が行われ、その実態が明らかにされてきた。特に岸本直文による神獣像表現の分類に基づいた製作系統論は、三角縁神獣鏡の製作者集団やその変遷を明らかにする画期的な研究であった（岸本1989, 1995等）。しかし、製作者に関しては「集団」までの指摘に留まり、製作工人を個人レベルまで迫った研究はこれまでほとんど行われてこなかった。また編年に関しても、多くの編年案が出されているものの、各論者で一致しない部分も多く、問題がある。

これらの課題を解決するため、本論では銘文の文字の形に注目し分析を行った。文字の形に注目した理由としては、製作工人個人の文字である銘文の文字の形には個人の癖が現れると考えられ、個人レベルで製作工人を分析することが可能であるためである。また、文字は漢字文化の中で時代とともに変化すると考えられ、その変化を銘文の文字の形の変化の中に見出すことで、新たな三角縁神獣鏡の編年案を提示することが可能だと考えるからである。

### 2. 用語の定義

本題に入る前に、まず本論で扱う用語の定義を明確にする必要がある。

これまでの三角縁神獣鏡の銘文研究の多くでは、文字の形の類似を示す際に、「書体が同じ」という表現がなされてきた。それは、これまでの考古学の文字研究における用語の定義として、以下のようなものが一般的であったためである（崎川2002:222）。

「字形」：文字の字画構造上の特徴を指し、一つの文

字を構成する字画数と、その基本構造の差異によって規定される。

「書体」：筆記具、書写媒体、筆記者の書き癖等の差異に起因して発生する形態的特徴を指す。具体的には形態的バランス、筆順、偏旁の位置関係、字画の交差角度、筆画構成、線分の太さ、文字の大きさ、等の諸要素の複合として認識される。

「筆跡」：特定個人の書き癖。「書体」概念を構成する要素の一つであるが、書体が書写媒体の差異、筆記具の差異等、個体差以外の外的要因に起因する形態差をも包含するのに対して、「筆跡」は専ら個体差に起因すると判断される形態的変異を指す。

「字体」：単に「文字のかたち」を指す概念で、字形、書体、筆跡の全てを包括する。

しかしながら、一般的に「書体」といえば、篆書体・隸書体・楷書体・草書体などの文字体系の差異を示す語であり、それらとの混同が起りやすくなる。また、上記の定義で完全に統一されているわけではなく、様々な定義が用いられ、混乱を招いていた。

しかし近年、これらの問題を解消させようと、新たな用語の定義が検討されている（石塚2012；大西・宮本2009；佐藤2016）。

そこで、これらの定義を参考に、本論においては以下の様に用語を定義した<sup>1)</sup>。

「書体」：楷書体・隸書体などの、漢字の形において存在する社会共通のデザイン。

「字体」：書体ごとに存在する、理想的で抽象的な文字の形。筆画の多寡など、字体の異なる文字を「異体字」と呼ぶ。

「字形」：実際に書かれた、個別具体的な字の形。手書き文字の場合、同じ字形は存在しない。つまり、銘文においては同範鏡<sup>2)</sup>以外で字形は一致しない。

「字形タイプ」：個々の字形の中で、近似した形態的特徴を持つものの纏まり。その特徴は、個人の癖や地域・字体の差などに起因する。

また、個々の鏡を指し示す際に目録番号を用いる。目録番号とは京都大学の博物館図録（京都大学文学部考古学研究室 1989）で付けられた通し番号で、新たな鏡が出るたびに更新される。今回用いる目録番号は、日本考古学協会 2010 年度兵庫大会第 2 分科会の「三角縁神獣鏡地名表」（日本考古学協会 2010 年度兵庫大会第 2 分科会 2010）と下垣仁志の「三角縁神獣鏡目録」（下垣 2010）を参照した。以下、目録番号 6 番の鏡を指す場合、「6 鏡」の様に指し示す。また、目録番号がまだついていない埼玉県東松山市高坂古墳群出土鏡は「東松山鏡」と仮称しておく。

### 3. 先行研究と問題点

100 年以上続く三角縁神獣鏡研究の中で重要な地位を占め続けてきた銘文研究の多くは、「正始元年」「至海東」などの銘文の内容に関する研究（富岡 1916；西田 1980 等）や、銘文の押韻・仮借に関する研究（笠野 1993 等）、銘文の系譜研究（林 1998 等）など、銘文が釈読された後の釈文研究であった。

釈文を研究するこれらの研究に対し、文字を神獣像などと同様にその形自体に注目する字形研究は、三角縁神獣鏡の研究においてほとんど行われてこなかった。ただ、個別の鏡における字形の類似の指摘は度々行われてきた。

まず、三角縁神獣鏡の紀年鏡が銘句以外にも字そのものが似ていることは、これまで多く指摘されている（西田 1971；福山 1974 等）。福山敏男は景初三年銘と正始元年銘の三角縁神獣鏡と景初三年銘の画文帯神獣鏡について、「筆致もよく似ている。それは四鏡が同じ工房で同じところに作られたことを語る」（福山 1974：3）と述べている。

製作者集団を明らかにした岸本直文は、製作工人を三派に分けたうちの四神四獣鏡群（表現①②③<sup>3)</sup>）について、表現②と③が「両群とも、文様帯の方格に「天」にならず「天王日月」となった例を含み、両者のつながりを如実に示している。」（岸本 1989：23）と述べており、笠野毅も「天字は、字形のまゝに読めば、六または元であるが、（中略）やはり天と釈すべきであろう。」（笠野 1984：7）と指摘している。この「天」字については、分析を行うこととする。

笠野はその他にも字形について言及しており、奈良県新山古墳出土の 32 鏡について、「「吾」で始まるが、図像の表現方法や形態・銘の文句や書体から見て、同じ三角縁神獣鏡の中の「陳氏作鏡」銘の一群と同工である。」（笠野 1984：7）と指摘するが、これは後に岸本直文の詳細な図像分析により、陳氏作鏡群の 1 つとして認識された（岸本 1989）。さらにこの鏡について、「第二句の有は、部分的に鏡胎が盛上がったうえに鑄出され、しかも第三句および五句の有とは書体を異にする。（中略）すなわち、この有字は、溶范に施された異筆の後刻。」（笠野 1984：7）という指摘も行っており、この指摘は「有」の字形分析において重要であるため、後に再び触れることとする。

銘文系譜を説いた林裕己も、島根県造山 1 号墳 2 号槨出土の「特異な一群」（福永 1992）の方格規矩鏡が、陳氏作鏡と「書体も共通していて陳氏作鏡である可能性も考えられる。」（林 1998：62）と述べているが、これは三角縁神獣鏡と他の鏡群との関連を匂わせる重要な指摘である。

他鏡群との字形の具体的な比較が行われた事例として、「吾作明鏡獨奇保子宜孫富無訾」銘を持つ中国河北省易県出土の方格規矩鳥文鏡と、同銘の静岡県松林山古墳出土三角縁神獣鏡との字形比較が挙げられる。岡村秀典はこれらの文字について、「完全に一致するだけでなく、不自然な「鏡」や「独奇」の字形、「人べん」のくせなど、銘文の筆跡が同一工人の手になるとしか考えられないほどよく似ている。」（岡村 1999：159）と評した。方格規矩鳥文鏡を実見した福永伸哉と森下章司も、「「作」「鏡」「保」「奇」などの字体のくせもよく似ている。」（福永・森下 2000：131）としたが一方で、「「吾」の四画目までの部分の表現方法、「子」の頭部を丸く表現する（燕下都鏡）と逆三角形にする（松林山鏡）といった相違」（同：131）をもって、「同一工人とは断定できないまでも、両者の製作工人が近い系譜に属していた可能性は高い。」（同：132）として慎重な姿勢を示している。

以上の字形比較は、三角縁神獣鏡や関連鏡群の中の特定の数面における比較のみであったが、40 面近くの銘文の「書体」を比較し、図像との関連も含めて研究を行ったのが西田守夫である（西田 1971）。まず、奈良県新山古墳出土の尚方作三角縁神獣鏡と図像や形態・「尚方」銘など多くの共通点を持つ奈良県佐味田宝塚古墳出土の尚方作三角縁神獣車馬画像鏡を「同じ文章が同じ書体で書かれている」（同：217）と論じ、さらに三角縁神獣鏡に特異な徐州銘のある鏡群についても、「銘文には多少異同があるが、書体もよく似ている。」（同：222）と指摘する。陳氏鏡群についても、「各種の陳氏作鏡の銘文は書体が似ていて、殆んど同一人、

少なくとも同時代の製作によると考えられる。」(同：202)と論じており、さらに吾作の 32 鏡が陳氏作の 58・59・61・82 鏡の銘文と「殆んど同文で、特に書体には特徴があって、同一人が書いたとしか考え難い程、よく似ている。」(同：232)として、吾作鏡にも陳氏作鏡が含まれることを示した。

これまでの多くの字形研究では、字形が「似ている」ことに関して、類似する字形の箇所などの具体的な根拠を挙げることはほとんどなく、主観的な判断に頼っていた。岡村が前述の 2 面に対して人偏の癖や「獨奇」の形などが似ていると具体的な文字を指摘したが(岡村 1999)、その類似の具体的な形やその妥当性に関する議論はされておらず、主観的な類似論であり、実見した福永と森下に「吾」や「子」の具体的な相違点を指摘されている(福永・森下 2000)。

このような考古学における字形研究に対し、文字学的な銘文の字形分析を行ったのが、書学者である福宿孝夫であった(福宿 1991・1993)。書学者による研究のため、これまでほとんど注目されることは無かったが、方法論については注目すべき点がある。

福宿は紀年鏡の銘文の字形に対し、中国の個別の碑や磚の字形との比較を行い、景初三年三角縁神獸鏡が魏鏡であり、その他を西晋以後の鏡と推定した。また、「陳」「母」「孫」などの字を具体的に比較し、工人差を推定している(福宿 1991)。共通する文字の具体的な字形比較や鏡以外の文字との比較を行うという方法論は参考になるが、考察内容や分析資料とした拓本には難があった。この 3 年後には拓本ではなく『三角縁神獸鏡綜鑑』(樋口 1992)掲載写真を参考にして 34 面の鏡の字形を比較している(福宿 1994)。この論文では「保」・「子」・「有」・「吾 / 五」・「宜」・「作」などの文字を具体的な字形のポイントで数種類に分類

している。この字形分類や異体・誤字体・逆字の度数を基に、「品等」を 4 つに格付けし、その「品等」が「陳是」の作か門人の作かの差であるとして時期差を導いている。しかし、字形分類の基準が不明・不正確な点もあり、考察にも飛躍がある。ただ、分類における対象文字や注目字形などは評価すべき点である。

以上、三角縁神獸鏡の字形研究史を見てきたが、字形に関しての言及は様々あるものの、その指摘は限られた事例に留まり、「類似」の基準も主観的判断や曖昧なものであった。そこで筆者は本論において、三角縁神獸鏡の銘文を網羅的に対象にし、客観的で明確な基準をもとにした字形分析を行うこととする。

## 4. 研究方法

### 4-1. 対象となる鏡

文字を分析対象とするため、三角縁神獸鏡の中でも銘文が榜題を持つ鏡のみが対象であるが、数例の例外<sup>4)</sup>を除いて、鏡の銘文の字形は同範鏡同士では完全に一致するため、同範鏡の中で 1 面を分析対象とすればよい。よって、今回分析対象となる三角縁神獸鏡は、新出の東松山鏡を含めて 104 種である(表 1)。

本論文では、分析対象は三角縁神獸鏡のみとし、盤龍鏡・方格規矩鏡・方格規矩鳥文鏡・画像鏡・神獸鏡などの三角縁神獸鏡と関連のある中国鏡の銘文は扱わない。これは、字形が製作者や時期以外にも、地域・デザイン・筆記具・材質・筆記姿勢などによっても大きく変化するものであるため、これらの要素が大きく異なる可能性があるその他の中国鏡と三角縁神獸鏡の比較は慎重に行うべきだからである。そのためまずは、ある特定の地域で集中的に作られたと考えられている三角縁神獸鏡のみを対象とすることで、工人差と時期差以外の要素を考慮しなくてよい分析を可能にした。

表 1 分析対象の鏡

| 目録番号  | 鏡名                | 目録番号  | 鏡名                 | 目録番号 | 鏡名                 | 目録番号    | 鏡名                 |
|-------|-------------------|-------|--------------------|------|--------------------|---------|--------------------|
| 1     | 画像文帝盤龍鏡           | 31    | 吾作二神六獸鏡            | 58   | 陳是作六神四獸鏡           | 94      | 鏡片(天・唐草文帯・神像有り)    |
| 6     | 王氏作盤龍鏡            | 32    | 吾作四神四獸鏡            | 59   | 陳是作五神四獸鏡           | 95      | 天・王・日・月・獸文帯二神二獸鏡   |
| 7     | 景初三年陳是作同向式神獸鏡     | 32-33 | 吾作四神四獸鏡            | 60   | 天・王・日・月・吉・獸文帯四神四獸鏡 | 96      | 天・王・日・月・獸文帯二神四獸鏡   |
| 8     | 正始元年陳是作同向式神獸鏡     | 33    | 陳・是・作・鏡四神四獸鏡       | 61   | 陳氏作六神三獸鏡           | 97      | 惟念比銘唐草文帯二神二獸鏡      |
| 9     | 天王日月・獸文帯同向式神獸鏡    | 34    | 張氏作四神四獸鏡           | 62   | 張是作六神四獸鏡           | 98      | 吾作二神二獸鏡            |
| 10    | 鏡片(天王日月・獸文帯有り)    | 35    | 吾作四神四獸鏡            | 64   | 天王日月・獸文帯四神四獸鏡      | 98-99   | 吾有好同三神三獸鏡          |
| 11    | ○作同向式神獸鏡          | 36    | 吾作四神四獸?鏡           | 65   | 日・月・獸文帯四神四獸鏡       | 99      | ○是作二神二獸鏡           |
| 13    | 陳氏作神獸車馬鏡          | 36-37 | 吾作四神四獸鏡            | 66   | 君・宜・高・官・獸文帯四神四獸鏡   | 100     | 尚方作二神二獸鏡           |
| 14    | 陳氏作神獸車馬鏡          | 37    | 吾作徐州銘四神四獸鏡         | 67   | 吾作四神四獸鏡            | 100a    | 尚方作二神二獸鏡           |
| 15    | 陳氏作神獸車馬鏡          | 39    | 新出四神四獸鏡            | 68   | 天王日月・獸文帯四神四獸鏡      | 101     | 吾作二神二獸鏡            |
| 16    | 陳是作四神二獸鏡          | 40    | 吾作三神四獸鏡            | 69   | 天王・日月・獸文帯四神四獸鏡     | 102     | 長・宜・子・孫・獸文帯三神三獸鏡   |
| 17    | 吾作四神二獸鏡           | 41    | 唐草文帯四神四獸鏡          | 70   | 天王・日月・獸文帯四神四獸鏡     | 103     | 君・宜・高・官・獸文帯三神三獸鏡   |
| 18    | 新作徐州銘四神四獸鏡        | 43    | 天王日月・獸文帯四神四獸鏡      | 71   | 天王・日月・獸文帯四神四獸鏡     | 104     | 天王日月・獸文帯三神三獸鏡      |
| 18"   | 新作徐州銘四神四獸鏡        | 44    | 天王日月・唐草文四神四獸鏡      | 73   | 君・宜・高・官・獸文帯四神四獸鏡   | 105     | 天王日月・獸文帯三神三獸鏡      |
| 19    | 新作徐州銘四神四獸鏡        | 45    | 天王日月・唐草文四神四獸鏡      | 74   | 天王・日月・獸文帯四神四獸鏡     | 107     | 日日日全・獸文帯三神三獸鏡      |
| 20    | 新作徐州銘?四神四獸鏡(半分のみ) | 46    | 天王日月・獸文帯四神四獸鏡      | 75   | 天王・日月・獸文帯四神四獸鏡     | 108     | 吾作九神三獸鏡            |
| 21    | 張氏作三神五獸鏡          | 47    | 天・王・日・月・獸文帯三神四獸鏡   | 76   | 日月日・唐草文四神四獸鏡       | 109     | 天・王・日・月・獸文帯三神三獸鏡   |
| 22    | 吾作五神四獸鏡           | 48    | 天・王・日・月・吉・獸文帯四神四獸鏡 | 77   | 天王・日月・獸文帯四神四獸鏡     | 110     | 日・月・獸文帯三神三獸鏡       |
| 23    | 吾作三神五獸鏡           | 48-49 | 天・王・日・月・吉・獸文帯四神四獸鏡 | 78   | 鏡片(天王日月・獸文帯有り)     | 111     | 君・宜・官・獸文帯三神三獸鏡     |
| 25    | 吾作三神五獸鏡           | 50    | 吾作四神四獸鏡            | 79   | 王氏作徐州銘四神四獸鏡        | 112     | 天・王・日・月・獸文帯二神二獸一虫鏡 |
| 26    | 吾作三神五獸鏡           | 51    | 天王日月・獸文帯四神四獸鏡      | 80   | 天王日月・鋸歯文帯四神四獸鏡     | 120-121 | 天王日月・獸文帯一仏三神四獸鏡    |
| 27    | 吾作四神四獸鏡           | 52    | 陳是作四神四獸鏡           | 81   | 天王日月・獸文帯四神四獸鏡      | 136     | 陳孝然作波文帯四神三獸博山炉鏡    |
| 28    | 吾作五神四獸鏡           | 52-53 | 吾作四神四獸鏡            | 82   | 陳氏作四神二獸鏡           | 211     | 獸文帯三神三獸鏡           |
| 29    | 吾作六神四獸鏡           | 53    | 張是作四神四獸鏡           | 91   | 天・王・日・月・獸文帯二神二獸鏡   | 227     | 獸文帯三神三獸鏡           |
| 29-30 | 吾作四神四獸鏡           | 54    | 吾作四神三獸博山炉鏡         | 92   | 天・王・日・月・獸文帯二神二獸鏡   | 233     | 吾作三神三獸鏡            |
| 30    | 吾作四神四獸鏡           | 57    | 天王・日月・獸文帯五神四獸鏡     | 93   | 天・王・日・月・唐草文帯二神二獸鏡  | 東松山鏡    | 陳氏作四神二獸鏡           |

表2 文字の頻度

| 文字 | 王   | 天   | 日   | 月   | 有  | 作  | 鏡  | 子  | 大  | 明  | 宜  | 甚  | 好  | 上  | 吾  | 文  |
|----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 字数 | 177 | 141 | 128 | 107 | 62 | 58 | 57 | 41 | 40 | 39 | 39 | 34 | 31 | 31 | 29 | 28 |
| 文字 | 人   | 孫   | 龍   | 母   | 父  | 保  | 章  | 君  | 東  | 食  | 玉  | 師  | 不  | 古  | …  | 氏  |
| 字数 | 25  | 24  | 24  | 23  | 23 | 23 | 22 | 18 | 18 | 17 | 17 | 17 | 16 | 16 | …  | 12 |

#### 4-2. 対象とする文字

字形を分析する際に、どの文字を分析するのかという問題がある。これまでの字形分析では、数点の銘文・文字を比較し、その類似から同一工人を指摘してきた(岡村 1999; 福永・森下 2000 等)。しかしながら、その文字のその類似が工人の同一性と関係があるという保証はない。その文字の一般的な字形つまり字体である可能性や、複数工人が同一字形タイプを書く可能性もある。また注目した字形の差異が、同一工人によるその日の気分等で左右されるような差異である可能性もある。こういった可能性を少なくするためには、同一文字を多量に分析して、偶然ではない差異や類似を抽出し、他の文字による分析を重ね合わせることで妥当性を上げていくことが必要である。

以上のことを行うためには、文字の頻度が重要である。三角縁神獣鏡の銘文の中での同一文字の頻度<sup>5)</sup>を見ると(表2)、最も多いのは「王」であり、次いで「天」「日」「月」である。これらの頻度の突出は、1つの鏡において複数の方格に「天王日月」・「天王」・「日月」銘が入れられることに起因しており、しかも「王」字は長銘文内の「西王母」「東王父」などの銘句でも使われているため最も多くなっている。頻度としては圧倒的に高いが、これらの文字は方格という狭いスペースで書かれることが多く、文字自体も直線的で字形に大きな変化が見られない。しかしながら、「天」字については前述のように一部に明らかな字形タイプ差が見られるため、分析を行うこととする。

「天王日月」に次いで多い「有」「作」「鏡」「子」については、明らかな字形タイプ差が認められるため、分析を行った。その他「吾」「母」についても分析を行い、文字数が少ないながらも字形タイプの明らかな差が認められた「氏」についても分析を行った。

#### 4-3. 分析資料

字形分析を行う際に、字形がばやける拓本資料や字形の不明瞭な写真資料を用いることは適さない。近年、奈良県立橿原考古学研究所の水野敏典を中心に三角縁神獣鏡を含む様々な鏡の三次元計測が行われ、一般にも公開されている(奈良県立橿原考古学研究所編 2006; 水野編 2010 等)。この新たな技術による三次元計測画像は影や色による妨げを受けないため、一部の薄い銘文を除き、銘文の字形を詳細に判別することができる。よって本論では、三次元計測画像を基



1: 三角縁 2: 篆書 3: 隸書 4: 楷書

図1 三角縁神獣鏡と各書体の「有」の比較

本的な分析資料とし、三次元計測が行われていない鏡については、車崎正彦や樋口隆康らによる集成(車崎編 2002; 樋口 1992・2000 等)や各報告書・図録等に掲載された字形の明確な写真を用いることとする。

### 5. 三角縁神獣鏡の文字に関する前提

#### 5-1. 銘文の書体

三角縁神獣鏡の銘文を分析する前に、その銘文の書体を考える必要がある。中国の漢字文化の中で、使われる書体は時代とともに変遷していくが、三角縁神獣鏡の製作年代の候補である三国期から西晋までの時期は、篆書・隸書が衰退し楷書・行書・草書に移り変わっていた過渡期に相当し、衰退した典型的な字体ではない篆隸が特定の用途で使われる中で、未完成な楷行草が広く実用で使われ始めていた(貞廣 1988; 角井監修 2009)。

すると、三角縁神獣鏡の銘文の書体を時期から簡単に決めることは難しい。ただし、崩した文字ではないため、草書・行書ではない。漢鏡の「書風」について分析した研究では、三角縁神獣鏡の銘文の字形に似た文字を「やや方形な小篆」(安生 2013: 7)としている。しかし、篆書の字体と比べれば明らかに三角縁神獣鏡の銘文字形は異なり、どちらかと言えば隸書・楷書に似ている。しかしながら隸書の波磔<sup>6)</sup>や楷書のハネが無いなど、複雑である(図1)。

筆者は書を専門に研究しているわけではないので、本論文では明確な断定を避けるが、以上のことを考慮すると、三角縁神獣鏡の銘文書体は、篆隸が楷書に徐々に変化していく中での中間的な書体であるという程度の指摘にとどめることとする。

#### 5-2. 銘文の書き手について

銘文分析から工人に迫るためには、その銘文を書いた工人がどのような工人であるのかを考慮する必要がある。特に、銘文専門の工人がいたのか、それとも図像を彫る工人自身が書いたのかは、図像表現との関係を考えるうえで重要になってくる。

岡村秀典は、後漢代の「尚方作」鏡で図像内容と銘文内容が一致しないのは「図像を彫る工人と銘文を刻む工人との連携がはかられていなかった」(岡村

2017:75) ためであると指摘し、各工程専門の工人を想定する。三角縁神獣鏡でも、例えば 34 鏡の銘文に「上有仙人赤松子」とあるが、図像に赤松子は存在しないなど図像内容と一致しない銘文が多い。しかしこれは、後漢の「尚方作」鏡と同様の原因によるものではなく、三角縁神獣鏡の銘文が既存の鏡の銘文を合成して作られた「継ぎ接ぎだらけの妙技の銘文」(林 1998:66) であることが原因である。

官営工房である「尚方」やそれに連なる「青蓋」などの規模の大きい工房には、銘文専門の工人がいた可能性はある。しかし、三角形神獣鏡を作る陳氏や張氏などの民間工房において、専門の工人がいたかは疑問が残る。後漢時代の尚方の工人で、後に個人工房として独立したとされる「杜氏」は、斬新な銘文と図像をもつ鏡を創作し「名工」と自称する(岡村 2010)。共通する独自性からして、銘文と図像は同一工人つまり「杜氏」によるものであろう。こういった中国の民間工房の例に鑑みれば、三角縁神獣鏡も銘文と図像は同一の工人によるものと考えられるのではないだろうか。

異なる視点から考えてみると、図像と銘文をつなげるものとして、図像の側に書き図像の説明をする榜題が挙げられる。この榜題を誰が書いたのかという問題だが、後述するように、榜題の文字の字形タイプと銘文中の文字の字形タイプが一致する鏡があり、銘文を書く工人が榜題を書いていると考えられる。三角縁神獣鏡において榜題は、基本的に図像の余白を埋めるものの 1 つであり、仙人や鳥像などの図像も余白に描かれることからすると、図像を彫る工人と榜題を書く工人は同一であると考えるのが自然である。よって、銘文を書く工人と図像を彫る工人は同一であると考えられる。

これらのことから、本論では銘文と図像は同一工人

によるものとして、論を進めることとする。

### 5-3. 字形タイプの信頼性

字形分析の際、各文字に対し複数の字形タイプを分類していくが、それらの字形タイプ差が工人差や時期差に起因するものであって、気分やその他の要因によって簡単に変化するものではないことを前提としなくてはならない。今回の分析においては、これを担保するために、同一銘文内で複数回現れる対象文字において、字形タイプが一致するかを検証する。同一銘文内で字形タイプが一致すれば、その銘文を書いた工人がその製作時期に持つ特有の字形タイプであるということが言えるからである。

## 6. 分類に基づく字形の分析

### 6-1. 吾・五

三角縁神獣鏡の長銘文の多くでは、冒頭に「某氏作鏡」という銘句を付け鏡製作者名を表わしている。しかし、具体的な姓を示さない場合、「吾作明鏡」等の銘句が使われる。つまり「吾」という文字は「張氏」や「陳氏」という作鏡者集団に関わらず一定頻度で用いられるため、作鏡者を跨いだ分析を行うことができる。

まず「吾」字を列举する(図 2)。

「吾」の下部の「口」部分に関してはほとんど字形に変化が無いので、上部の「五」部分に注目する。「五」の字形タイプに関する既存の研究として五銖銭の「五」文字の研究がある。五銖銭の「五」と「銖」の字形の変化は編年の指標となっており、岡内三眞による五銖銭の編年では、交差する 2 画目と 3 画目の交差具合の僅かな変化によって編年が行われている(岡内 1982)。これに倣って、今回は 2 画目と 3 画目の違いで大分類

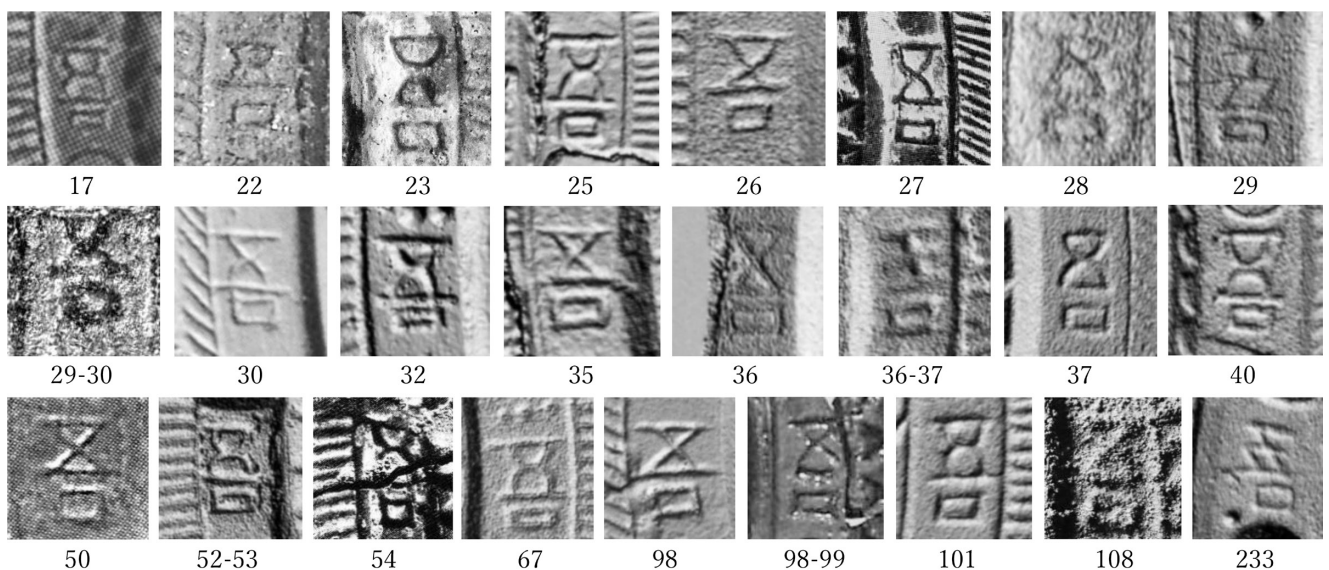


図 2 各鏡における「吾」字形

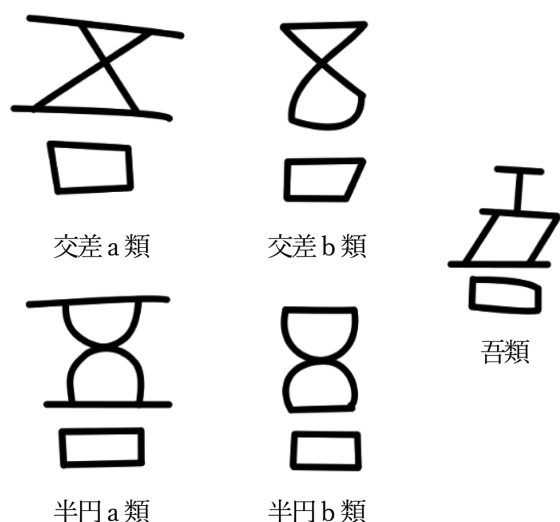


図3 「吾」字形タイプ

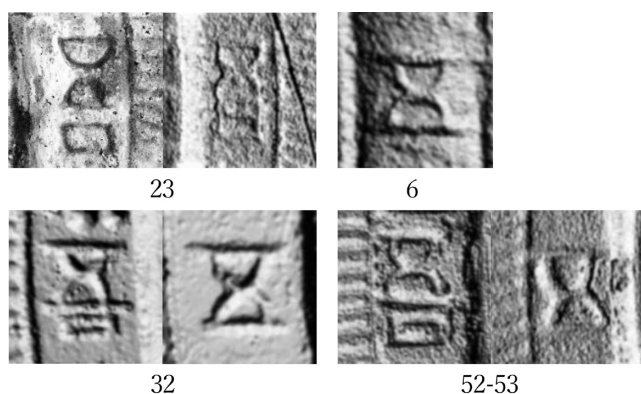


図4 同一銘文中の「吾」と「五」

を行い、横棒の長さで小分類を行った(図3)。

交差a類：Xの様に交差。横棒がはみ出る。

(26・27・29-30・30・35・36・50・98鏡)

交差b類：Xの様に交差。横棒がはみ出ない。

(98-99・108鏡)

半円a類：半円を上下に重ね、横棒が横へはみ出す。

(17・22・25・32・40・52-53・54・67・101鏡)

半円b類：半円を上下に重ね、横棒が横にはみ出ない。

(23・28・37鏡)

吾類：楷書の「吾」に近い。

(29・36-37・233鏡)

「吾」という文字は、ほとんどが冒頭の「吾作」の1回でしか用いられない。ただ、23鏡は唯一銘文に2回「吾」が用いられており、どちらも半円b類である(図4)。また、今回の「吾」の字形タイプは「五」部分での分類なので、銘文中に「五」字のある6・32・52-53鏡も分析対象となる。32・52-53鏡では「吾」も使われており、どちらも半円a類である一方、6鏡は「五」のみで、半円a類に分類される(図4)。

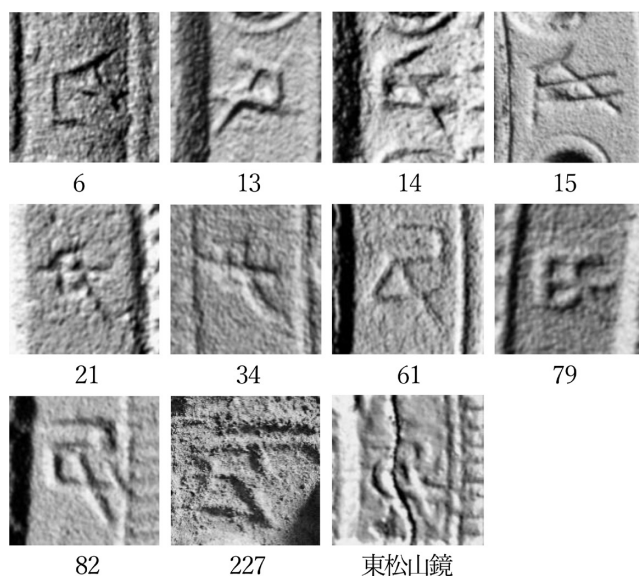


図5 各鏡における「氏」字形

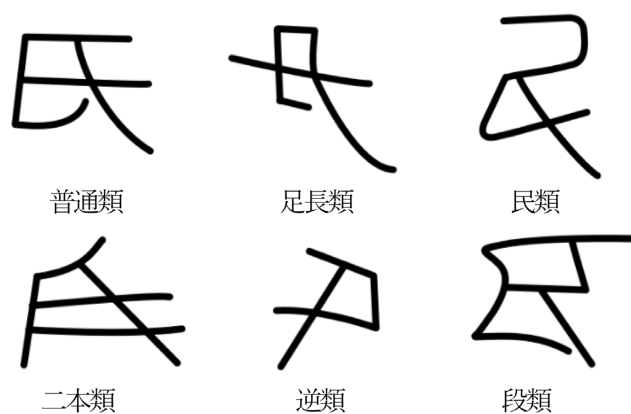


図6 氏「字形タイプ」

## 6-2. 氏

前述したように、銘文の冒頭は「某氏作鏡」という銘句を付けて作鏡者を明示することが多いため、「氏」という文字は出現量も多く、また各鏡に1つずつあるため多くの鏡を分析対象にできるように思える。しかし、「氏」という文字は、仮借され「是」という文字になることも多く、鏡数を比べると「氏」が12面<sup>7)</sup>、「是」が10面でありほぼ同数である。「是」については確固たる字形タイプ差を見出せなかったが、「氏」に関しては12面ながらも特徴的な字形タイプ差が見られたため、分析対象とした。また、先に分析した「吾」とは使用経緯から、用いられる鏡がほぼ一致しない。

「氏」字を列举してみると、一見ただけでも明らかな異同が見られる(図5)。

そして、以下の様に字形タイプを分類した(図6)。

普通類：普通の「氏」。作鏡銘は「王氏」。

(6・79鏡)

足長類：3画目の横棒が左から突き出ており、4画目が1画目の始点から始まり長く伸びる。作鏡銘は「張氏」。

(21・34 鏡)

民類：「民」のような字形になっており、2 画目と 3 画目が一筆で書かれる。作鏡銘は「陳氏」。

(61・82・東松山鏡)

二本類：3 画目の横棒が 2 本ある。作鏡銘は「陳氏」。

(14・15 鏡)

逆類：左右が逆転する。2 画目が下まで伸びない。作鏡銘は「陳氏」。

(13 鏡)

段類：4 画目が 1 本の直線ではなく、段状になる。

(227 鏡)

作鏡者銘から見ると、王氏の字形タイプが氏類で、張氏の字形タイプは足長類、陳氏の字形タイプが民・二本・逆・段類といった纏まりが見える。

「氏」に関しては、用途が限られるため、同一銘文中で複数回用いられることはない。

### 6-3. 作

次に「作」の字であるが、この文字は最も今回の分析に適した文字である。文字数としては、6 番目の多さで

あるが、そのほとんどは銘文冒頭の「某氏作鏡」の部分で用いられ、先の「吾」や「氏」などの様に他の文字に変えられることも少なく、多くの鏡に 1 文字ずつ採用されるため、分析対象が多くなる。しかも、表現⑭の様にほぼ作鏡者名を書かない鏡群であっても、その冒頭は「新作大竟」であるため「作」による分析を行うことができる。

まず、各鏡の「作」字形を列举する(図 7)。

この大量な字形の分類において、今回は傍の E の上の形態に注目し、以下の様に分類した(図 8)。

斜類：斜めの線が、E の左上端に向かって下ろされる。

(13・14・15・16・17・21・22・32・52・52-53・54・58・59・61・67・82・101・108・136・233・東松山鏡)



図 8 「作」字形タイプ

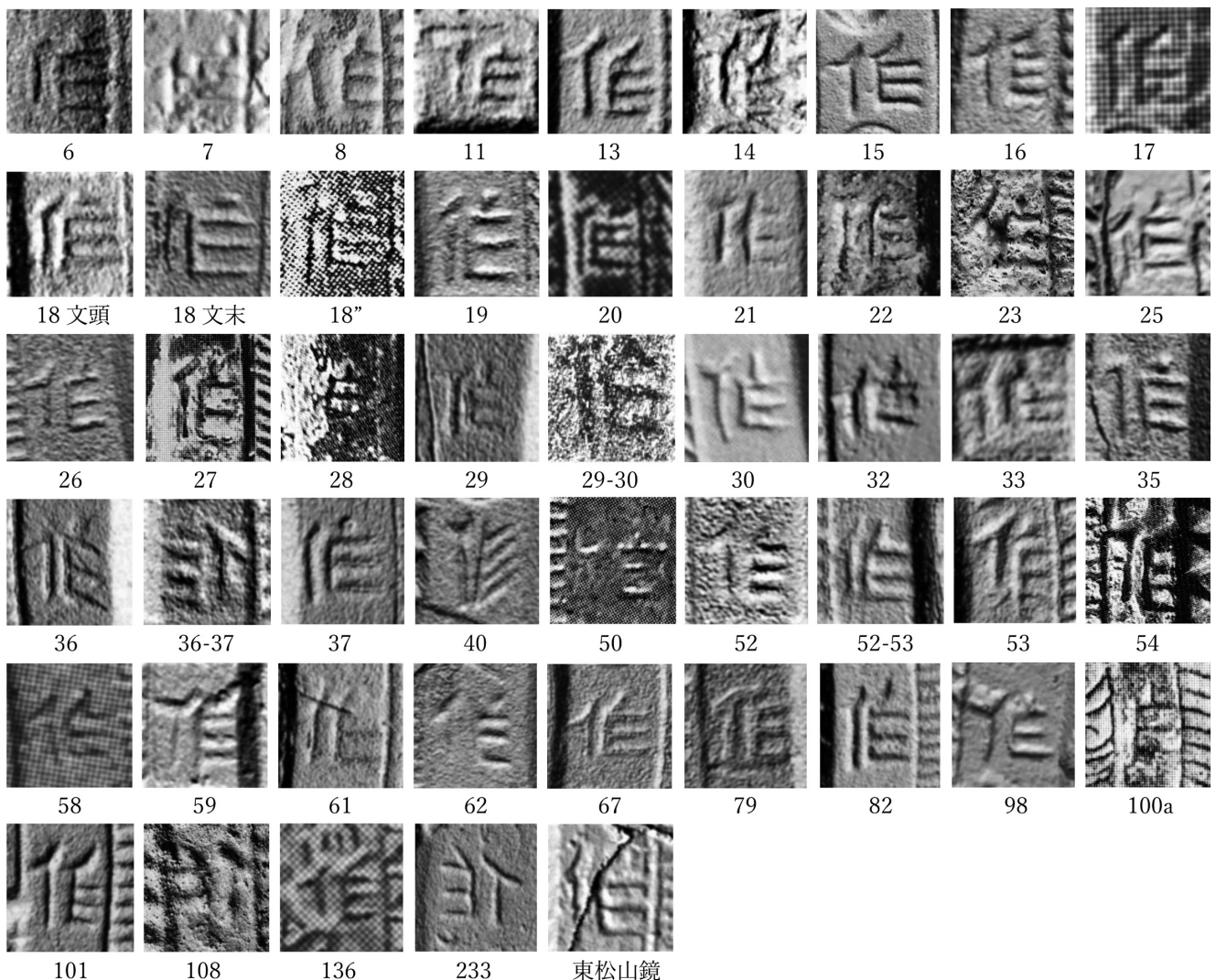


図 7 各鏡における「作」字形

点類：斜めの線にはならず、多くの場合点としてEの中心線上に書かれるが、Eの上辺と接触して縦線状になることもある。

(6・7・8・11・18・18”・19・20・23・25・26・27・28・29・29-30・30・33・35・36・36-37・37・50・53・62・79・98・100a 鏡)

特殊類：Eの横棒が4本になる特殊な形をなす。

(40 鏡)

「作」に関しても、文頭以外ではほぼ使われない文字であるが、18 鏡において唯一「作」が2回出現し、どちらも点類である(図7)。

#### 6-4. 鏡

鏡という文字もこれまでの3文字同様、銘文の冒頭で用いられる文字であり、「作」同様長銘文がある鏡ごとにほぼ1回は出現するため、比較はしやすい。こ

の「鏡」という文字は、偏が省略され「竟」となることも多いため、分析は傍の「竟」部分で行う。

まず、「鏡」字を列挙する(図9)。

そして「竟」の几部分に注目し、以下の様に分類した(図10)。

人類：几部分が上部で接触し、「人」のような形になっている。

(6・21・23・26・27・34・35・36・37・40・50・53・79・98・100・136 鏡)

ハ類：几部分が上部で接触せず、「ハ」のような形になっている。

(7・8・15・17・18・18”・19・25・30・31・32・33・36-37・39・52・52-53・54・58・59・61・62・67・82・100a・101・東松山鏡)

無類：几部分が無い。

(13・14 鏡)

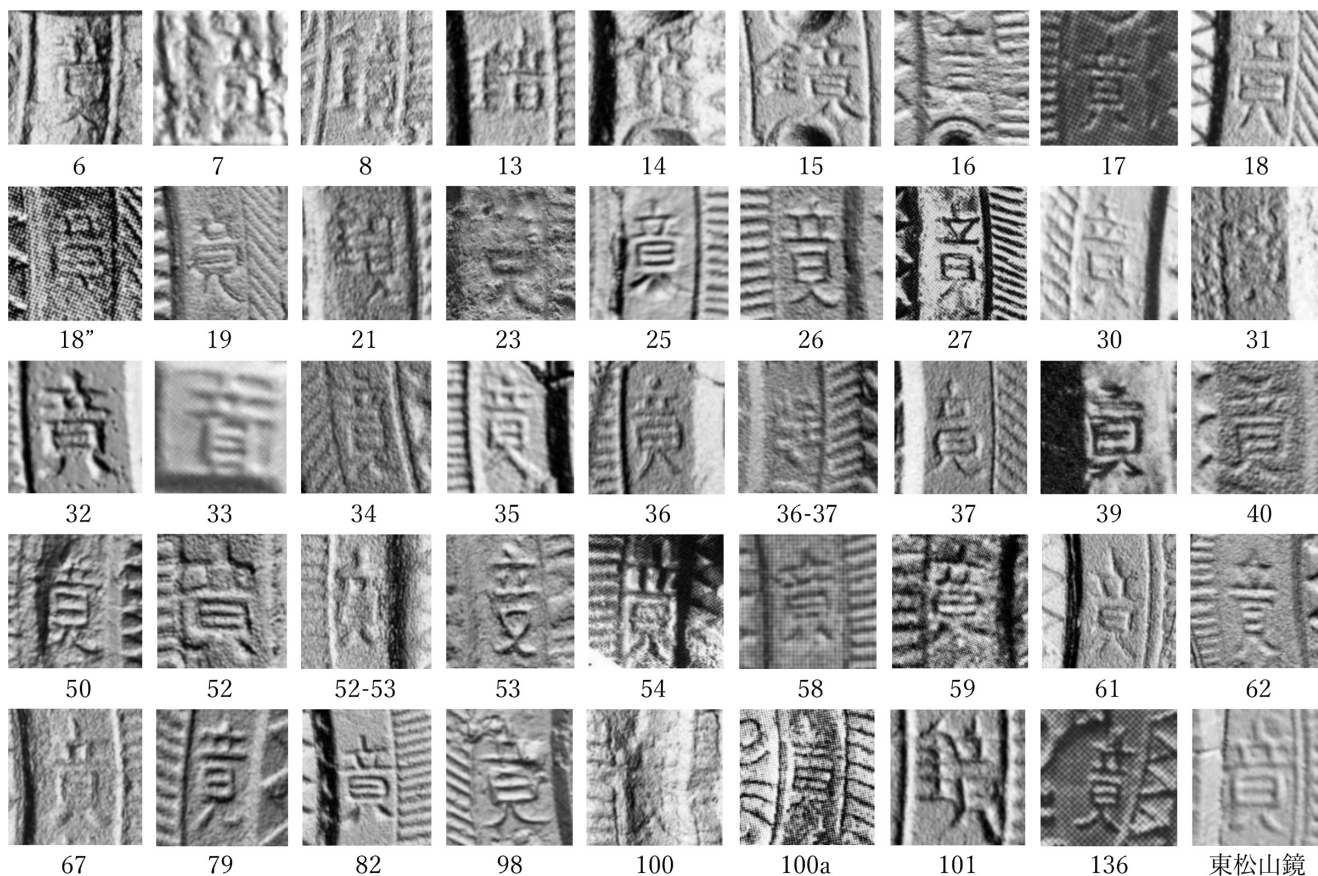


図9 各鏡における「鏡」字形



図10 「鏡」字形タイプ

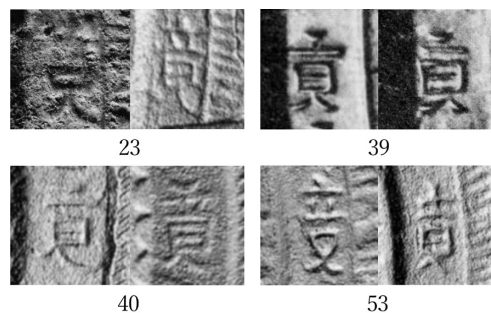


図11 同一銘文中の「鏡」

「鏡」という文字はほとんどの場合文頭で用いられるが、23・39・40・53 鏡では文頭のみならず銘文の後半でも使用されている。各々の字形タイプを確認すると、字形タイプは 23・40・53 鏡が人類で、39 鏡がハ類で一致している（図 11）。

### 6-5. 有

次に「有」という文字であるが、文字量としては 5 番目の多さであるため、字形タイプ比較の妥当性は上がる。しかしながら、この「有」字の頻度を多くしている原因は、同一銘文内での複数回の使用であり、32-33 鏡のように一銘文の中で 4 回「有」を使うこともあれば、15 鏡のように 1 回も「有」が出てこない銘文もある。よって、分析対象となり得る鏡は、先の「作」などと比べると、多少限られる。

まず、「有」字を列举してみる（図 12）。

分類に際しては 1 画目の形に注目し、下部の方向で大分類を行い、上部の湾曲で小分類を行った（図 13）。

沿 a 類：1 画目の下部が「月」部分に添うように流れ、上部が横棒よりも上で小さく湾曲する。

（21・22・29-30・30・31・34・98-99 鏡）

沿 b 類：1 画目の下部が「月」部分に添うように流れ、横棒と交差する所で湾曲する。

（13・16・25・32・32-33・52・58・59・61・67・82・東松山鏡）

沿 c 類：1 画目の下部が「月」部分に添うように流れ、

横棒の上で大きく湾曲する。

（97 鏡）

払 a 類：1 画目の下部が左へ払われ、横棒の上で鋭角に曲がる。

（26・50・98・100 鏡）

払 b 類：1 画目の下部が左へ払われ、横棒との交差付近で緩やかに湾曲する。

（7・8・52-53 鏡）

払 c 類：1 画目の下部が左へ払われ、横棒の上で湾曲が右上へ大きく湾曲する。

（18”・19・53・62 鏡）

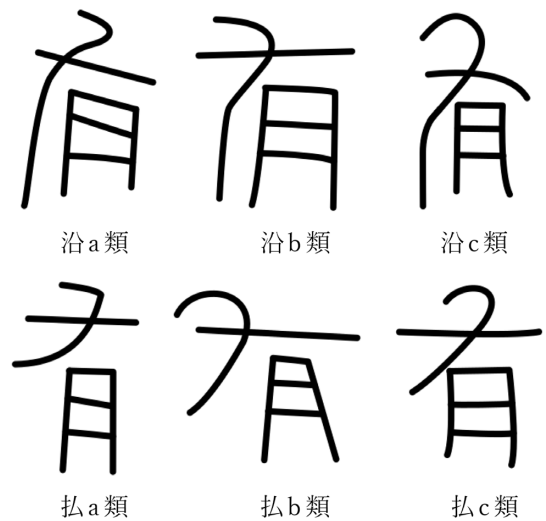


図 13 「有」字形タイプ

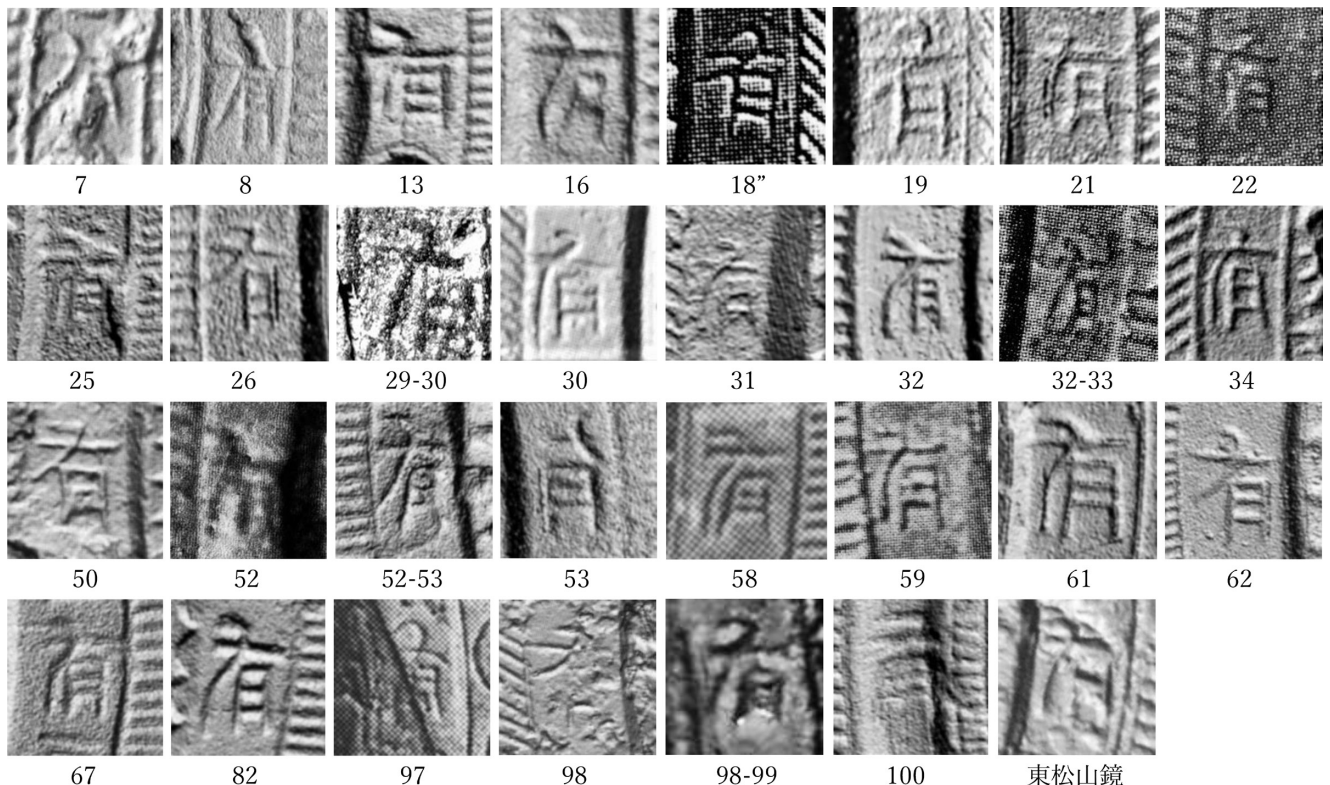


図 12 各鏡における「有」字形

前述したように、「有」は同一銘文中で複数回用いられる場合が多い。同一銘文内の字形タイプを比較すると、34 鏡では 2 回「有」が使用され字形タイプはどちらも沿 a 類で、82 鏡では 3 回「有」が使用され字形タイプは全て沿 b 類で、26 鏡では 2 回「有」が使用され全て払 a 類である（図 14）。

この様にほとんどの鏡では、銘文中での複数回使用において字形タイプが一致する。しかしながら、32 鏡と 62 鏡では字形タイプが一致しない（図 15）。

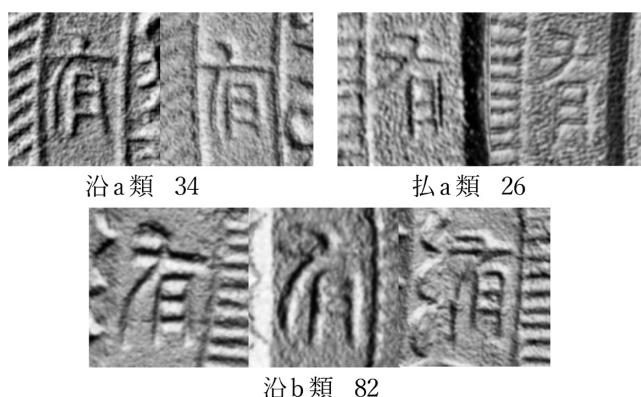


図 14 同一銘文中の「有」

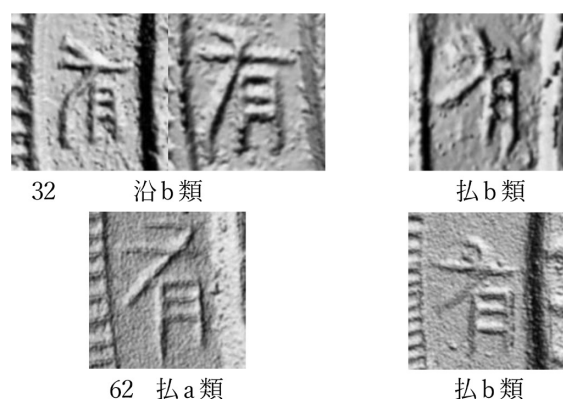


図 15 同一銘文中で字形タイプが異なる例

まず、32 鏡では「有」字が銘文中に 3 回用いられる。その内 2 つは沿 b 類だが、残り 1 つは払 b 類である。この差については前述したように、「異筆の後刻」（笠野 1984：7）と既に解釈されている。つまり沿 b 類が本来の工人の字形タイプであり、払 b 類は別工人のものである。この違いは現存する 2 面の同範鏡で共通するため、鋳型作成直後の補修と考えられるが、今後沿 b 類の「有」字を持つ同範鏡が出る可能性もある。

次に 62 鏡について考えると、作鏡者銘は「張是」だが、表現①の張氏に対してこちらは表現⑨である。表現⑨は内区の表現が張氏の表現①とは明らかに異なり、陳氏作の表現⑥の直接的な影響を受けている（岸本 1989）。表現⑥とのつながりは図像だけではなく、銘帯に方格を入れ、その方格上にも銘文を書くという特徴も同じである。しかし表現⑨では方格内が吉祥句でなく長銘文の一部が書かれる例や、方格内の文字方向が外向きでない例があるなど、表現⑥に比べて特殊である。さらに文字に関しても、銘文中で文字と呼べないほど大きく字形が崩れるなど非常に特殊である。このような特異な鏡群である表現⑨における例外については、工人差などとは別の原因が考えられるが、別の機会に検討することとする。

## 6-6. 母

次に「母」であるが、この文字の使用は「西王母」という銘句においての使用にほぼ絞られる。西王母は三角縁神獣鏡の内区に描かれている図像のひとつであり、銘文と図像をつなぐ銘句である。しかも、「西王母」という銘句は、内区の西王母像の近くに榜題として書かれることもある。

まず、「母」字形を列举する（図 16）。

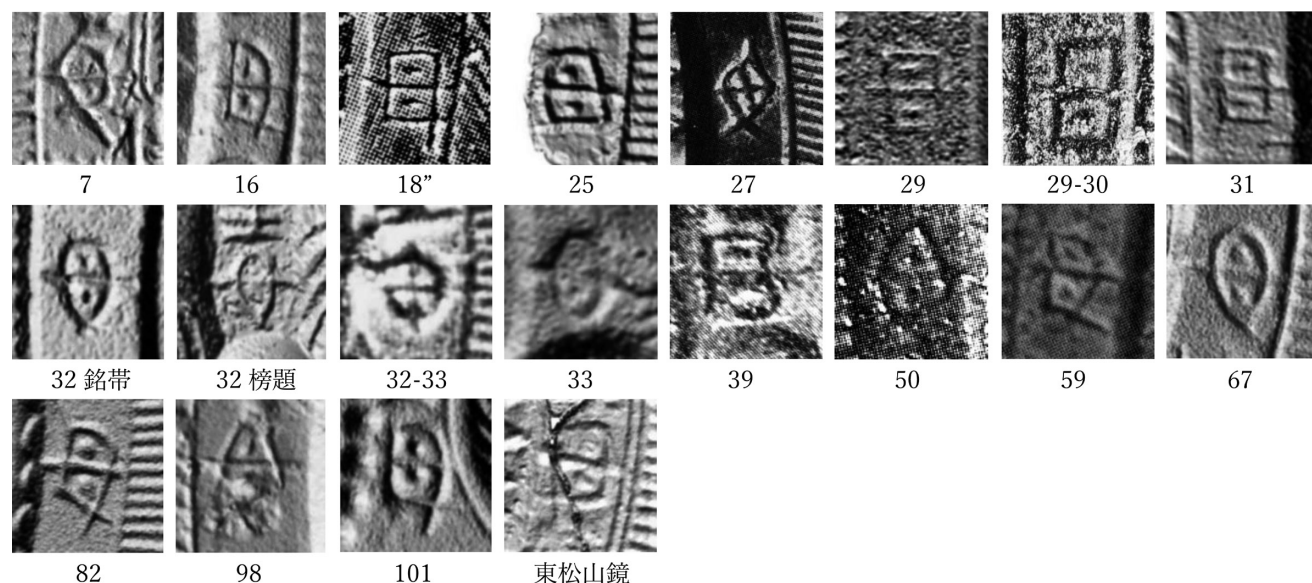


図 16 各鏡における「母」字形

分類に際しては交差部分の位置で大分類を行い、形状やバランスで小分類を行った（図 17）。

中 a 類：下部の中央で交差し、角が無く全体的に丸みを帯びる。

（32・32-33・33・67 鏡）

中 b 類：下部の中央で交差し、横棒と交差する付近で角張って曲がる。

（27・50・98 鏡）

端 a 類：下部の左右どちらかの端で交差し、中心の横棒に対し上下左右の線が並行直角に書かれ、全体的に四角い。

（18”・29・29-30・31・39 鏡）

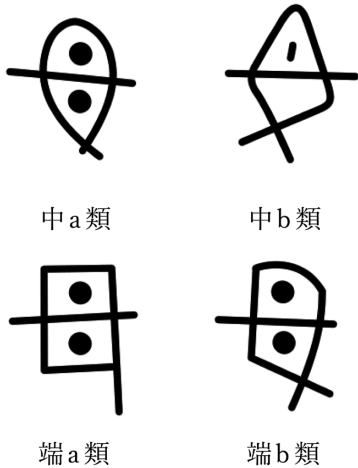


図 17 「母」字形タイプ

端 b 類：下部の左右どちらかの端で交差し、中心の横棒に対し上下左右の線が傾いており、丸みを帯びやすい。

（7・16・25・59・61・82・101・東松山鏡）

「西王母」という銘句は、前述したように榜題にも書かれるが、32 鏡では「西王母」の銘文と榜題が共存している。字形タイプはどちらも中 a 類である（図 16）。これは、前述した銘文と榜題を書く人物が同一人物であることの証拠となる。

## 6-7. 子

「子」という文字は、「天王日月」の 4 文字を除いて、4 番目に頻度の多い文字である（表 2）。しかし、この文字が用いられるのは、「作」「鏡」など同様の文頭ではなく、末尾の「保子宜孫」といった吉祥句や、図像を説明する「師子」や「赤松子」といった句の中である。これらの銘句は、「某氏作鏡」ほど広く共通して用いられるわけではないため、「子」字のみでは一部の鏡のみしか対象にできない。しかし、「子」は「好」や「孫」などの文字の偏や旁としても見られ、これらもある程度の頻度をもって銘文中に現れるため、偏や傍の「子」字形も合わせて分析することで、多くの鏡を分析の対象とした。ただ、傍や偏における字形は変化する可能性があることも考える必要がある。

まず、「子」字形を列挙する（図 18）。



図 18 各鏡における「子」字形

字形の分類に際しては、「子」の上部の形に注目し、3分類を行った(図19)。

三角類:上部の逆三角形が、全て直線で構成されている。

(27・29-30・30・31・35・36・36-37・39・40・50・53・62・79・98・100・233鏡)

曲線類:上部が曲線を有している。

(7・8・13・14・15・16・17・18・18”・19・21・22・23・25・32・32-33・34・37・52・52-53・54・58・59・61・67・82・98-99・101・102・108・233・東松山鏡)

四角類:上部が四角形になっている。

(26鏡)

図19に示した通り、曲線類には2パターン存在する。これは、文字の小ささや錆などによって、この2パターンのどちらに分類すべきか判断が付きかねる字形が多かったため、今回はこの2パターンを纏めて曲線類とした。

この分類の妥当性の確認として「子」「好」が同一銘文中にある曲線類の101鏡を見てみると、どちらも曲線類であり、この分類は妥当といえるであろう。三角類の30鏡では「子」「孫」「好」が同一銘文中にあるが、全て三角類であり、こちらの分類も妥当と言える(図20)。四角類は1例のみである。

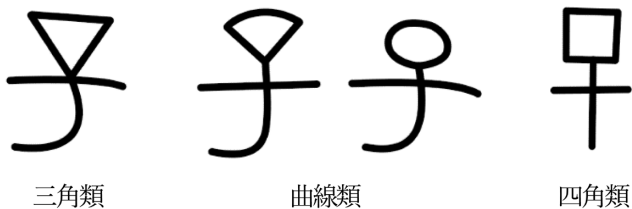


図19 「子」字形タイプ

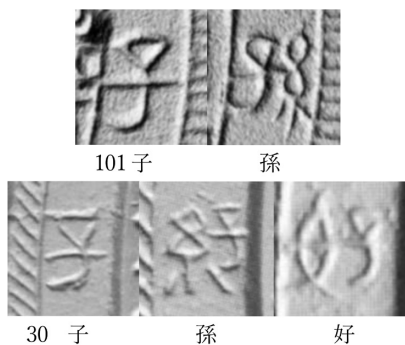


図20 同一銘文中の「子」

## 6-8. 天

最後に「天」であるが、前述したように「天」という文字は最も使用頻度が高く、その出現パターンは2種類ある。1つ目は、獣文帯などの途中に入れ込まれた方格内における「天王日月」「天王」「天」などの銘句として現れる。2つ目は、某氏作鏡で始まる長銘文において主に「天下」という銘句の中で使用される。この2つの「天」の出現パターンの違いが、「天」の字形を左右する可能性を考慮し、「天」字形を方格内のものと長銘文内のものに分けて列挙する(図21)。

そもそも4画しかない「天」なので、あまり多くの字形の違いは見られないが、まず1つの差として、上下の横棒の長さの差が目につく。例えば、9鏡や80鏡・41鏡などの「天」は2本の横棒の長さがほぼ同じであるのに対し、92鏡や17鏡・30鏡などは下の横棒の方が長い。しかしこの差は工人差や時期差などではなく、空間による制約が原因と考えられる。2本が同じ長さの「天」は字幅を制限する方格などに書かれたものが主であり、長銘文内でも41鏡のような銘帯幅が狭い場合は2本の長さが同じである。一方、長さの異なる「天」は左右の空間に余裕のある長銘文内に書かれたものが主であり、方格内でも60鏡や93鏡などの空間に余裕がある場合には長さに差が生まれている。よって、この差は今回扱わない。

そこで、横棒以外の「人」部分に注目して分類を行った(図22)。

元類:「人」部分が下の横棒より上に突き出ず「元」となっている。

(69・70・71・74・75・77・80鏡)

天類:普通の「天」字形。

(6・9・17・21・23・29・30・31・35・36・39・41・43・44・46・51・54・60・68・78・81・91・92・93・94・104・105・108・109・120-121鏡)

縦長類:二股に分かれる部分が横棒より下で分かれる。(95鏡)

元類の字形タイプについては、これまでも指摘されている(笠野1984・岸本1989)ことは前述した。

元類と天類を銘文空間の観点から比較すると、同じく「天王日月」4文字を同一方格内に書く68鏡が天類で80鏡が元類であるため、銘文空間の違いによるものとは考えられない。足長類に関しては1例しかないため考察は難しいが、縦長の方格に書かれているため、その空間的規制の中で全体的に字形が縦長になってできた天類の特殊例と考えるのが妥当なのかもしれない。

方格内の「天王日月」銘は1つの鏡の中で4回以上繰り返される中で字形タイプが共通するかを確認する

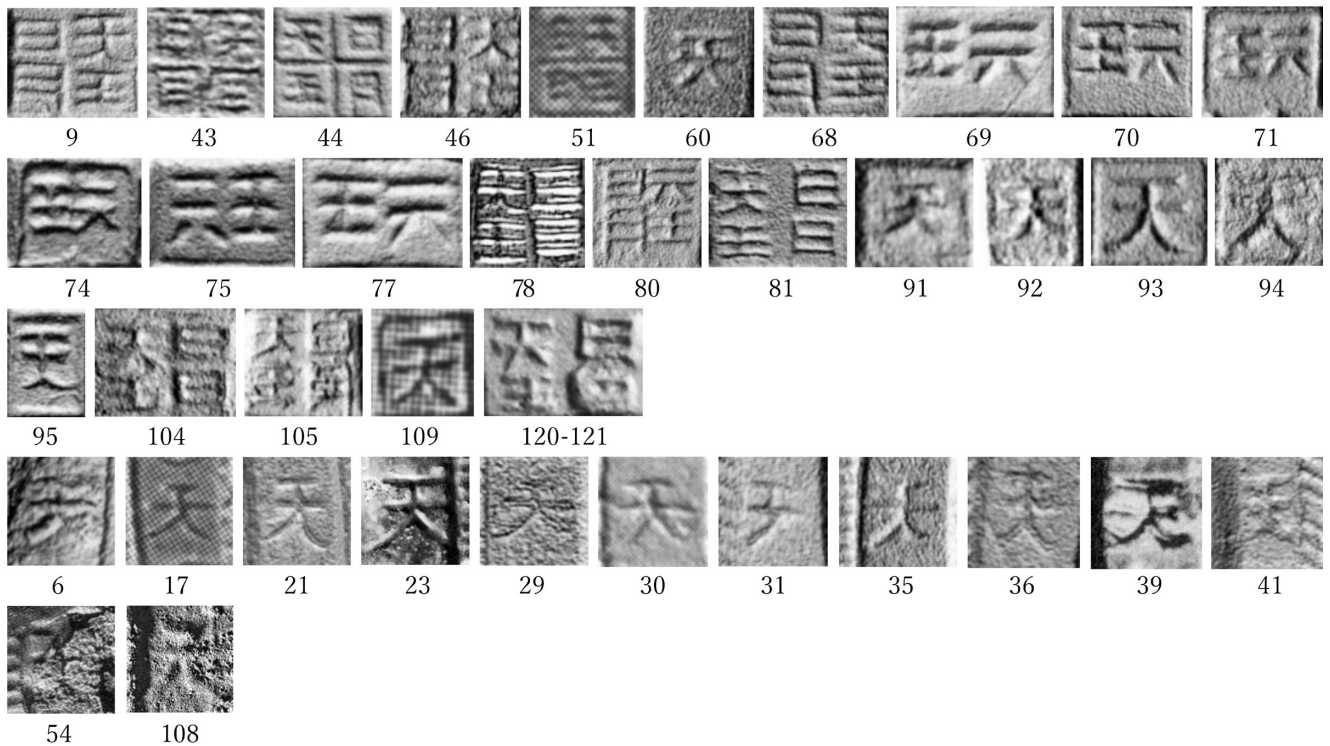


図 21 各鏡における「天」字形



図 22 「天」字形タイプ

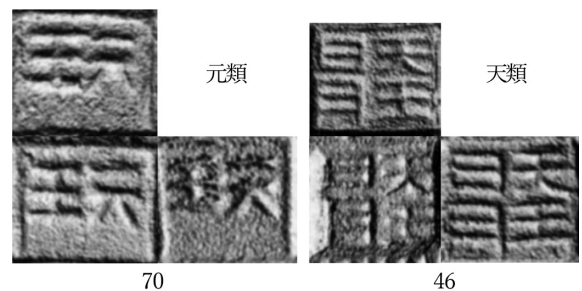


図 23 同一銘文中の「天」

と、「天王」が 7 回繰り返される 70 鏡ではすべてが元類であり、「天王日月」が 8 回繰り返される 46 鏡ではすべて天類である（図 23）。足長類に関しては、「天」字は 1 つである。しかし唯一 80 鏡の「天」字は元類 3 つと天類が 1 つであるという問題があるが、この鏡については考察部分で触れることとする。

## 7. 考察

### 7-1. 時期差

#### 7-1-1. 「作」

これまで見てきた 8 文字の字形タイプの差の中で、時期差に起因するものを判別する手がかりとして当時の篆隸から楷書へという書体の変遷を用いるため、まず各文字の書体ごとの主な字体を示す（表 3）。

これらと各文字の字形タイプを比較した結果、今回時期差に起因するものとして「作」に注目した。

「作」を斜類と点類に分類する指標としている傍の E の上の形態を書体ごとに見ていくと、篆書では縦長

の棒として表現されており、隸書では点となり、楷書では斜めの線が E の左上端に触れながら左側へ払っていく。これを字形タイプと比較すると、点類は隸書の特徴そのままである。一方、斜類は楷書の様に左へ傾いているが、楷書の様に払いが E の左上端を通り過ぎず、左上端を終点とする。E の上の形態が、書体の変遷と共に中心から左方へと動いていく過程と捉えれば、隸書＝点類→斜類→楷書という順序が導かれる。つまり、斜類は隸書・点類から楷書へ移り変わる途中の中間的な字形であると考えられる（図 24）。

よって、点類が古く斜類が新しいという編年が導かれる。この編年は、最も古いと考えられている年号鏡が全て点類であり、舶載鏡の中でも新しい鏡群とされる波文帯鏡群（小林 1979）の 136 鏡や仿製段階の 233 鏡が斜類であることも矛盾しない。そして、点類の時期を点段階、斜類の時期を斜段階と定義する。

表3 各文字の書体ごとの主な字体

|    | 吾・五   | 氏   | 作  | 鏡   | 有   | 母  | 子  | 天  |
|----|---|---|--|---|---|--|--|--|
| 篆書 | <br>秦<br>嶧山刻石  | <br>魏<br>正始石經    | <br>秦<br>泰山刻石     | <br>說文篆文       | <br>魏<br>正始石經    | <br>後漢<br>嵩山開廟石闕銘 | <br>西周<br>大孟鼎   | <br>秦<br>嶧山刻石   |
| 隸書 | <br>後漢<br>圉令趙君碑<br><br>後漢<br>熹平石經 | <br>後漢<br>乙瑛碑    | <br>後漢<br>熹平石經    | <br>後漢<br>曹全碑  | <br>後漢<br>孔宙碑    | <br>後漢<br>史晨後碑    | <br>後漢<br>曹全碑   | <br>後漢<br>西狹頌   |
| 楷書 | <br>北魏<br>弔比干墓文  | <br>唐<br>李昌妃鄭中墓誌 | <br>唐<br>柳公權金剛經刻石 | <br>北魏<br>元詮墓誌 | <br>唐<br>顏師古等慈寺碑 | <br>唐<br>簿夫人墓誌    | <br>隋<br>美人董氏墓誌 | <br>唐<br>孟友直女墓誌 |

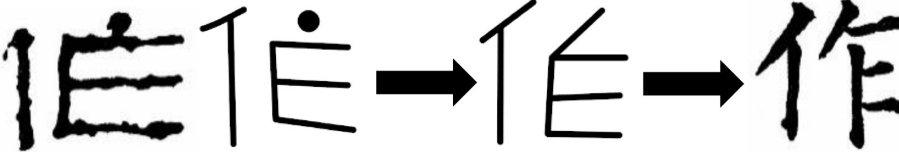
  
 隸書                      点類                      斜類                      楷書

図24 「作」編年

## 7-1-2. 既存の編年案との比較

次に、この編年を既存の編年案と比較する。

まず始めに、岸本直文による編年（岸本 1995）と比較する<sup>8)</sup>。この編年は、表現による纏まりを新納泉や澤田秀実による傘松文の型式変化による編年（新納 1991・澤田 1993）と統合させたものであり、舶載鏡をⅠ～Ⅴまでの5段階に分けている。

点類・斜類と岸本編年の対応は、以下のようになる。

- Ⅰ 点類：7・8・11・28・29・29-30・30・35・36-37・79 鏡  
斜類：なし  
不明：31・34 鏡
- Ⅱ 点類：23・25・26・27・33・36・37 鏡  
斜類：21・32・52・52-53・67 鏡  
特殊類：40 鏡  
不明：32-33 鏡
- Ⅲ 点類：6・18・18”・19・20・50・53・62・98 鏡  
斜類：58・59・61・82 鏡
- Ⅳ 点類：なし

斜類：13・14・15・16・17・54・108 鏡

Ⅴ 点類：なし

斜類：101・136 鏡

不明：99・100 鏡

第Ⅰ段階には点類のみだが第Ⅱ段階では半々になり、第Ⅳ・Ⅴ段階では点類は無くなるなど、次第に点類が減り斜類が現れる傾向にあるが、第Ⅱ・Ⅲ段階のどちらでも点類と斜類が共存するという問題点がある。

第Ⅱ段階では同じ表現⑦である点類の25・26 鏡と斜類の32・67 鏡が存在し、これらは第Ⅱ段階の基準となる傘松文2式を共有することを考えると、第Ⅱ段階の途中に点類と斜類の変化が起こったと考えられる。そのため、第Ⅲ段階の点類の鏡が問題となってくる。

まず表現④の徐州銘のある18・18”・19・20 鏡については、傘松文が2式相当なのにもかかわらず、特殊な配置や無文の外区斜面などのその他の要素から第Ⅲ段階に位置づけられており（岸本 1995）、根拠が乏しい。同じく徐州銘の37 鏡が第Ⅱ段階なことも

合わせて、これらは第Ⅱ段階と考えてよいだろう。

次に王氏作盤龍鏡の 6 鏡だが、盤龍鏡群自体の編年が曖昧で、その中でも 6 鏡は、同じく外区斜面に鋸歯文を持つ 3・4 鏡が第Ⅱ段階であるにもかかわらず、第Ⅲ段階に置かれており（岸本 1995）、第Ⅲ段階である根拠はない。よってこれも第Ⅱ段階以前と考えてよいだろう。

表現⑦の 50・98 鏡は、第Ⅲ段階に置かれる根拠が示されておらず、後述するように第Ⅱ段階の表現⑦と関係が深いため、第Ⅱ段階以前と考えてよいだろう。

最後に表現⑨の張是作鏡の 53・62 鏡だが、この鏡群は前述したように字形が崩れている鏡群のため、「作」の字形タイプは考慮する必要がないと考える。実際、どちらも左上端に接してはいないが、その方向に点が向いており、斜類の崩れたものなのかもしれない。

以上の結果、岸本編年は第Ⅲ段階の鏡を一部第Ⅱ段階以上に修正する必要がある、修正した結果、第Ⅰ段階が点段階、第Ⅱ段階が点段階と斜段階、第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ段階が斜段階と対応していると考えられる。

次に岩本による編年（岩本 2008）と比較する。この編年は、挽型により生じる鏡の断面形態の差から A～V 群までの 27 群に分類し、外区形態の推移を基本にしつつ様々な要素を踏まえ、1～4 段階に分けている。

点類・斜類と岩本編年の対応は、以下のようになる。

- 1 点類：6・7・8・18・18"・19・28・29・29-30・30・79 鏡  
斜類：なし  
不明：31 鏡
- 2 点類：11・23・25・26・27・33・35・36・36-37・37・50・53・62・98 鏡  
斜類：13・14・15・16・17・21・32・52・52-53・58・59・61・67・82 鏡

特殊類：40 鏡

不明：32-33・34 鏡

3 点類：なし

斜類：54・108 鏡

4 点類：なし

斜類：101・136 鏡

不明：99・100 鏡

岩本編年では銘文を持つ鏡の多くが第 2 段階に含まれているため、細かい比較は難しい。ただ、第 1 段階は点類のみで斜類は無く、第 3・4 段階では点類がなくなる点は、点類から斜類への変化と合致する。岸本編年で問題となった王氏作盤龍鏡の 6 鏡や徐州銘の 18・18"・19 鏡がこちらでは第 1 段階であることも合致する。つまり、岩本編年の第 1 段階が点段階、第 2 段階で点段階と斜段階の転換期があり、第 3・4 段階が斜段階と対応していると考えられる。岩本が「生産面の特徴からは困難」（岩本 2008：45）とした第 2 段階の細分を行えた点で、「作」編年の有用性があるだろう。

以上、2つの既存の編年案と「作」による編年を比較してきたが、それを纏めると表 4 のようになる。今回の「作」編年は点段階と斜段階の 2 段階編年であり、従来の編年案と比べて大変大雑把な分類であるが、複数の 4～5 段階編年案によって複雑化してきたこれまでの三角縁神獣鏡の編年を一度見直すためには、このような単純な区分が必要になってくるのではないだろうか。

## 7-2. 工人差

### 7-2-1. 字形タイプの纏まりからみた工人

前節では字形タイプ差が時期差に起因するものとして「作」を取り上げたが、本節では残りの 7 文字の字形タイプ差を工人差に起因するものと考え、岸本表現による工人群を念頭に置きながら、同一字形タイプの纏まりと作鏡者銘などから複数の工人を特定した。

表 4 編年案対応表

| 岸本編年 | 「作」編年  | 岩本編年   |
|------|--------|--------|
| 第Ⅰ段階 | 点段階    | 第 1 段階 |
| 第Ⅱ段階 |        | 斜段階    |
| 第Ⅲ段階 |        |        |
| 第Ⅳ段階 | 第 3 段階 |        |
| 第Ⅴ段階 | 第 4 段階 |        |

(1) 張氏Ⅰ

目録番号：29-30・30・31 鏡

表現：①（30・31 鏡）・他（29-30 鏡）

字形タイプ：吾…交差a類 氏…無し 作…点類  
鏡…ハ類 有…治a類 母…端a類  
子…三角類 天…天類

その他の共通点：上部が2本の横線である「兮」

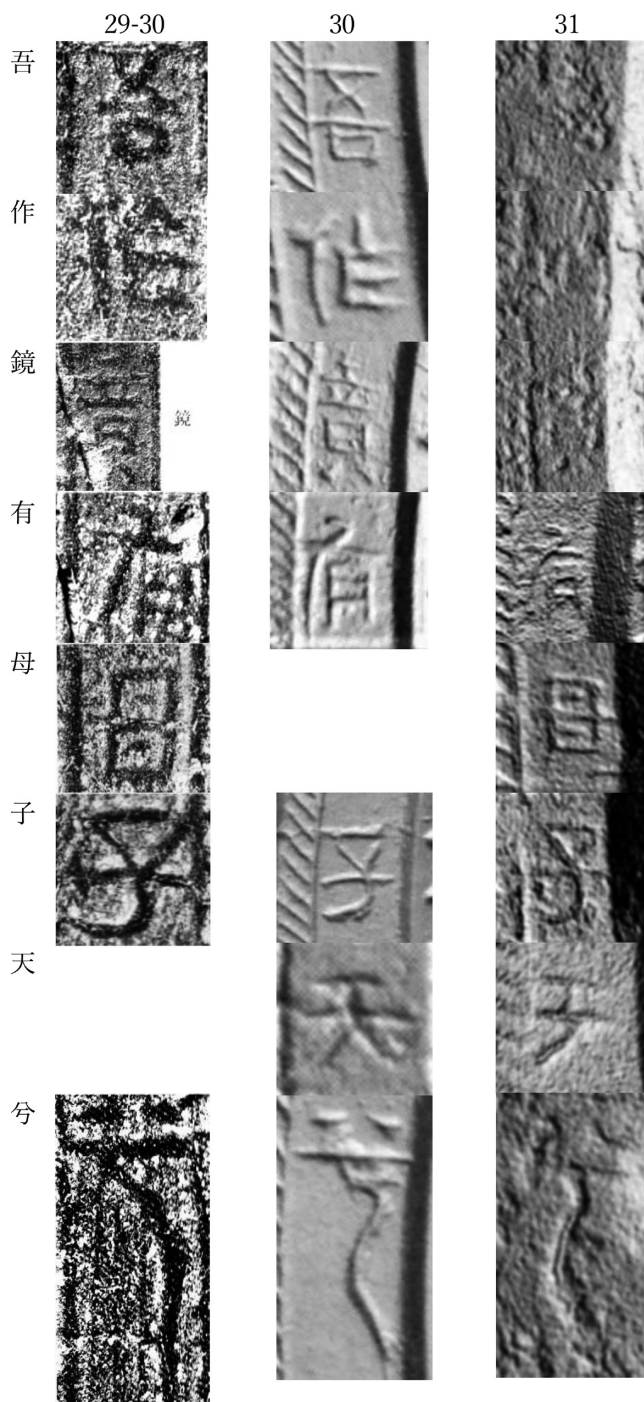


図 25 張氏Ⅰの字形

(2) 張氏Ⅱ

目録番号：21・22・34 鏡

表現：①

字形タイプ：吾…半円a類 氏…足長類 作…斜類  
鏡…人類 有…治a類 母…無し  
子…曲線類 天…天類

その他の共通点：上部が2つの丸点である「兮」

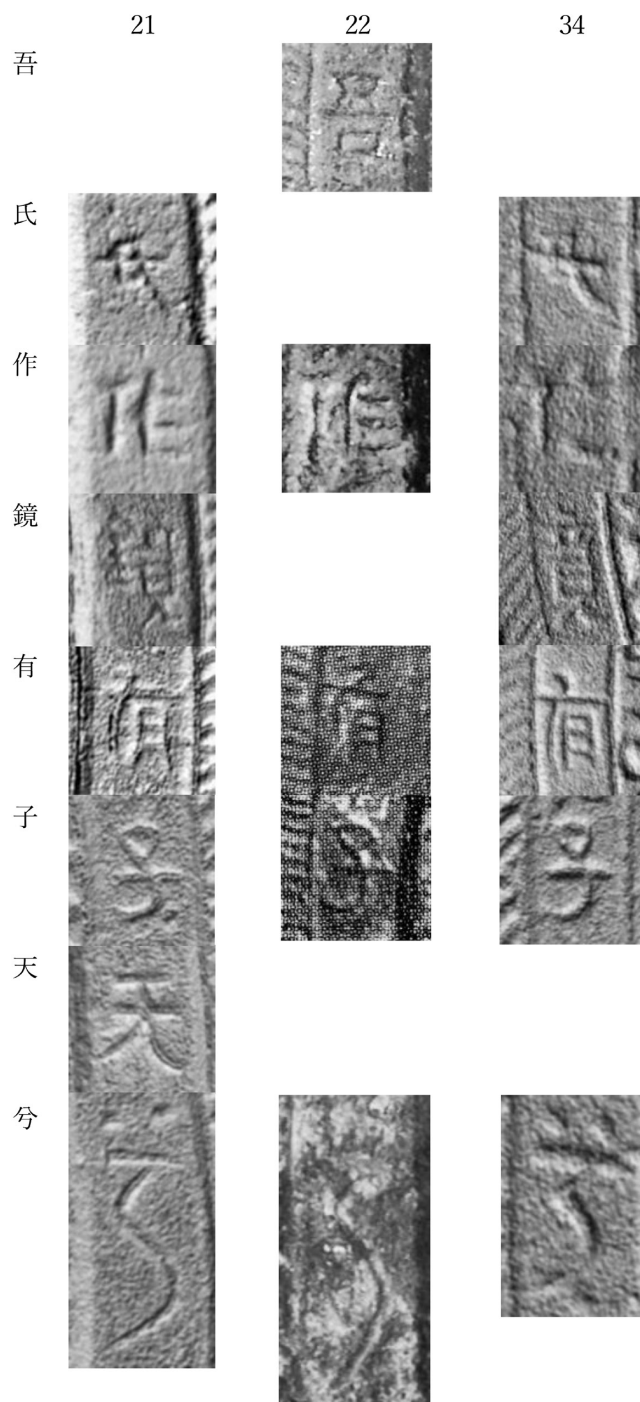


図 26 張氏Ⅱの字形

表 5 張氏Ⅰの字形タイプ

| 目録番号  | 吾・五 | 氏 | 作  | 鏡  | 有  | 母  | 子  | 天 |
|-------|-----|---|----|----|----|----|----|---|
| 29-30 | 交差a |   | 点  | 不明 | 治a | 端a | 三角 |   |
| 30    | 交差a |   | 点  | ハ  | 治a |    | 三角 | 天 |
| 31    | 不明  |   | 不明 | ハ  | 治a | 端a | 三角 | 天 |

表 6 張氏Ⅱの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏  | 作  | 鏡 | 有  | 母 | 子  | 天 |
|------|-----|----|----|---|----|---|----|---|
| 21   |     | 足長 | 斜  | 人 | 治a |   | 曲線 | 天 |
| 22   | 半円a |    | 斜  |   | 治a |   | 曲線 |   |
| 34   |     | 足長 | 不明 | 人 | 治a |   | 曲線 |   |

- (3) 張氏Ⅲ  
目録番号：35・36 鏡  
表現：①  
字形タイプ：吾…交差 a 類 氏…無し 作…点類  
鏡…人類 有…不明 母…無し  
子…三角類 天…天類  
その他の共通点：「人」のようになる「上」字形  
銘文の頭と末尾を区切る記号

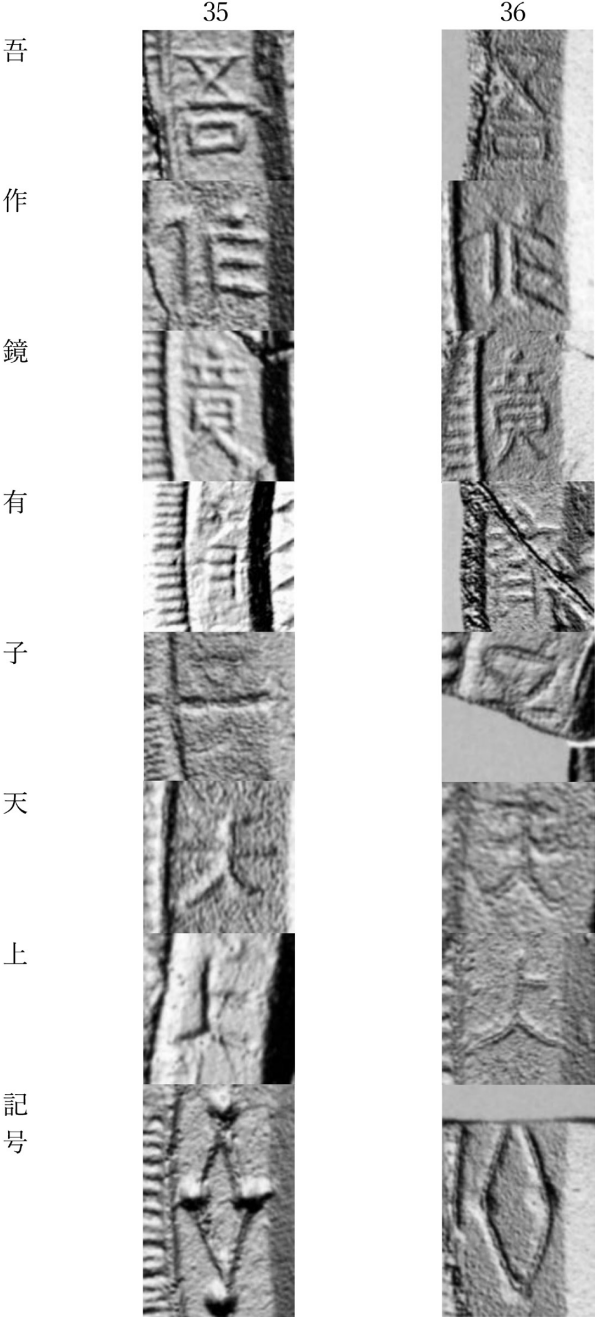


図 27 張氏Ⅲの字形

表 7 張氏Ⅲの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡 | 有  | 母 | 子  | 天 |
|------|-----|---|---|---|----|---|----|---|
| 35   | 交差a |   | 点 | 人 | 不明 |   | 三角 | 天 |
| 36   | 交差a |   | 点 | 人 | 不明 |   | 三角 | 天 |

- (4) 張氏Ⅳ  
目録番号：23・28・37 鏡  
表現：① (23・28 鏡)・⑭ (37 鏡)  
字形タイプ：吾…半円 b 類 氏…無し 作…点類  
鏡…人類 有…不明 母…無し  
子…曲線類 天…天類

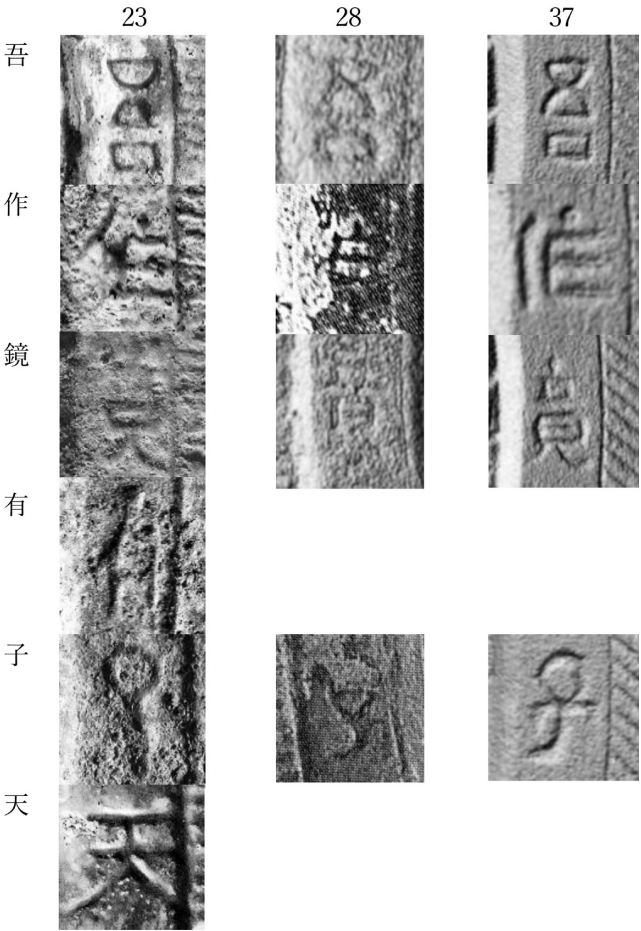


図 28 張氏Ⅳの字形

表 8 張氏Ⅳの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡  | 有  | 母 | 子  | 天 |
|------|-----|---|---|----|----|---|----|---|
| 23   | 半円b |   | 点 | 人  | 不明 |   | 曲線 | 天 |
| 28   | 半円b |   | 点 | 不明 | 不明 |   | 不明 |   |
| 37   | 半円b |   | 点 | 人  |    |   | 曲線 |   |

- (5) 徐州銘系  
 目録番号：18・18”・19・20 鏡  
 表現：⑭  
 字形タイプ：吾…無し 氏…無し 作…点類  
                   鏡…ハ類 有…払c類 母…端a類  
                   子…曲線類 天…無し  
 その他の共通点：徐州銘がある

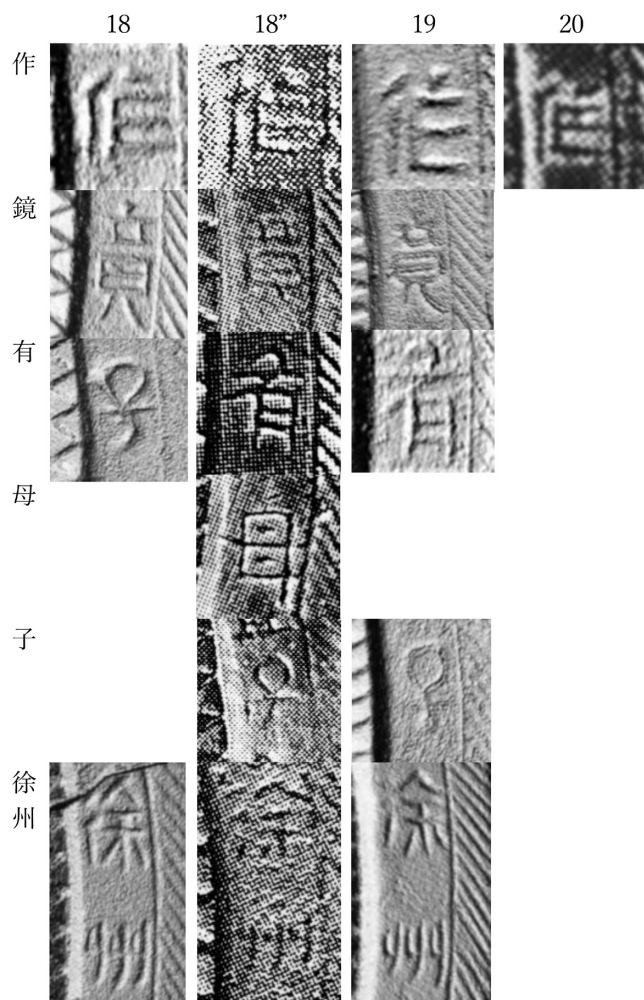


図 29 徐州銘系の字形

- (6) 王氏  
 目録番号：6・79 鏡  
 表現：盤龍鏡 (6 鏡)・① (79 鏡)  
 字形タイプ：吾…半円a類 氏…普通類 作…点類  
                   鏡…人類 有…無し 母…無し  
                   子…三角類 天…天類  
 その他の共通点：王氏作鏡銘がある

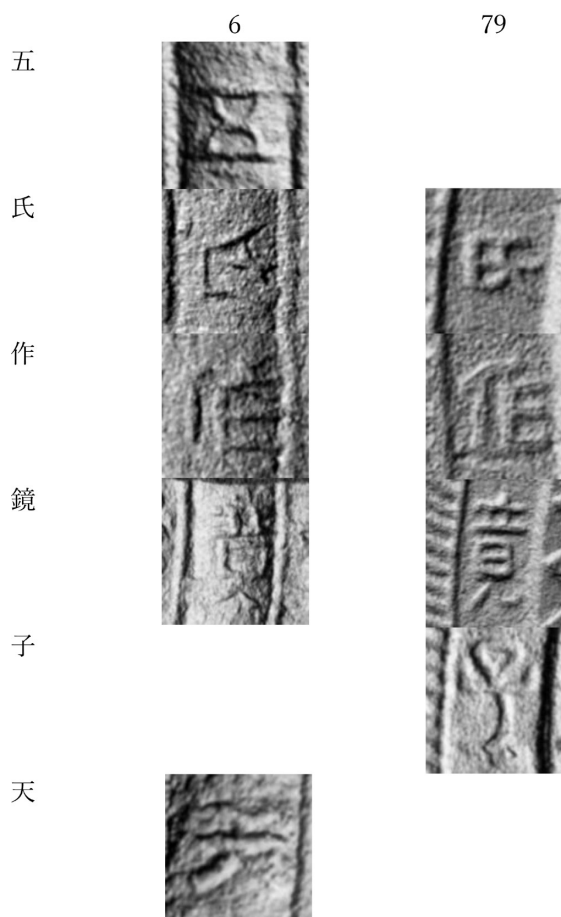


図 30 王氏の字形

表 9 徐州銘系の字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡 | 有  | 母  | 子  | 天 |
|------|-----|---|---|---|----|----|----|---|
| 18   |     |   | 点 | ハ |    |    | 曲線 |   |
| 18”  |     |   | 点 | ハ | 払c | 端a | 曲線 |   |
| 19   |     |   | 点 | ハ | 払c |    | 曲線 |   |
| 20   |     |   | 点 |   |    |    |    |   |

表 10 王氏の字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏  | 作 | 鏡 | 有 | 母 | 子  | 天 |
|------|-----|----|---|---|---|---|----|---|
| 6    | 半円a | 普通 | 点 | 人 |   |   |    | 天 |
| 79   |     | 普通 | 点 | 人 |   |   | 三角 |   |

- (7) 陳氏Ⅰ  
目録番号：7・8 鏡  
表現：他  
字形タイプ：吾…無し 氏…無し 作…点類  
鏡…ハ類 有…払b類 母…端b類  
子…曲線類 天…無し  
その他の共通点：紀年銘を持つ

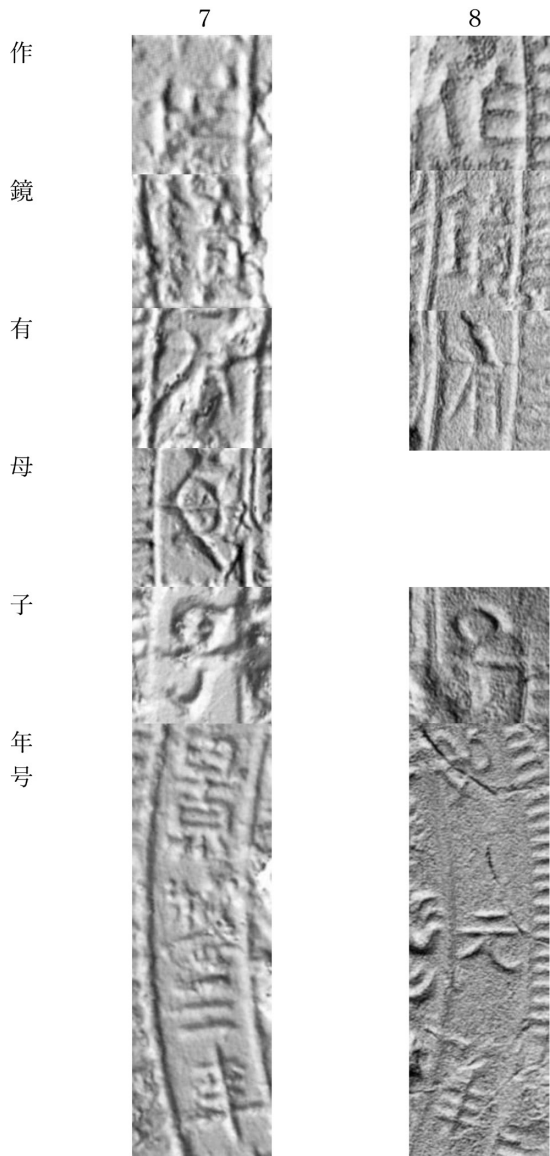


図 31 陳氏Ⅰの字形

- (8) 陳氏Ⅱ  
目録番号：26・27・50・98 鏡  
表現：⑦ (26・27 鏡)・⑪ (50・98 鏡)  
字形タイプ：吾…交差a類 氏…無し 作…点類  
鏡…人類 有…払a類 母…中b類  
子…三角/四角類 天…無し

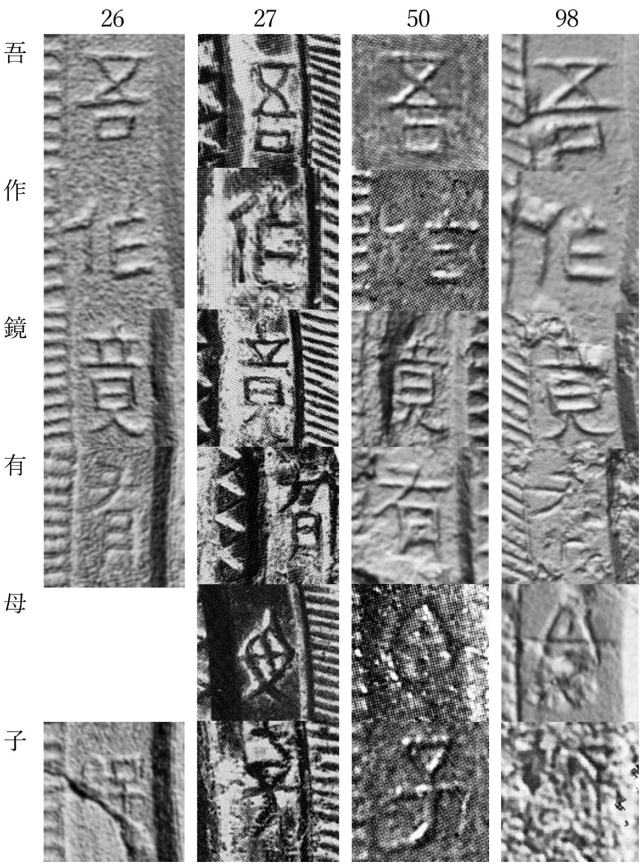


図 32 陳氏Ⅱの字形

表 11 陳氏Ⅰの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡 | 有  | 母  | 子  | 天 |
|------|-----|---|---|---|----|----|----|---|
| 7    |     |   | 点 | ハ | 払b | 端b | 曲線 |   |
| 8    |     |   | 点 | ハ | 払b |    | 曲線 |   |

表 12 陳氏Ⅱの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作  | 鏡 | 有  | 母  | 子  | 天 |
|------|-----|---|----|---|----|----|----|---|
| 26   | 交差a |   | 点  | 人 | 払a |    | 四角 |   |
| 27   | 交差a |   | 不明 | 人 | 不明 | 中b | 三角 |   |
| 50   | 交差a |   | 点  | 人 | 払a | 中b | 三角 |   |
| 98   | 交差a |   | 点  | 人 | 払a | 中b | 三角 |   |

(9) 陳氏Ⅲ

目録番号：32・32-33・33・52・52-53・67 鏡

表現：⑦

字形タイプ：吾…半円a類 氏…無し 作…点/斜類  
鏡…ハ類 有…沿b/払a類

母…中a類 子…曲線類 天…無し

その他の共通点：「口銜巨」の「口」「巨」字形

渦巻き状の「兮」

銘文の頭と末尾を区切る記号

表 13 陳氏Ⅲの字形タイプ

| 目録番号  | 吾・五 | 氏 | 作  | 鏡  | 有  | 母  | 子  | 天 |
|-------|-----|---|----|----|----|----|----|---|
| 32    | 半円a |   | 斜  | ハ  | 沿b | 中a | 曲線 |   |
| 32-33 | 不明  |   | 不明 | 不明 | 沿b | 中a | 曲線 |   |
| 33    |     |   | 点  | ハ  |    | 中a |    |   |
| 52    |     |   | 斜  | ハ  | 沿b |    | 曲線 |   |
| 52-53 | 半円a |   | 斜  | ハ  | 払b |    | 曲線 |   |
| 67    | 半円a |   | 斜  | ハ  | 沿b | 中a | 曲線 |   |



図 33 陳氏Ⅲの字形

- (10) 陳氏Ⅳ  
 目録番号：16・61・82・東松山鏡  
 表現：④（16 鏡）⑧（61・82・東松山鏡）  
 字形タイプ：吾…無し 氏…民類 作…斜類  
 鏡…ハ類 有…沿 b 類 母…端 b 類  
 子…曲線 天…無し  
 その他の共通点：「口銜巨」の「口」「巨」字形

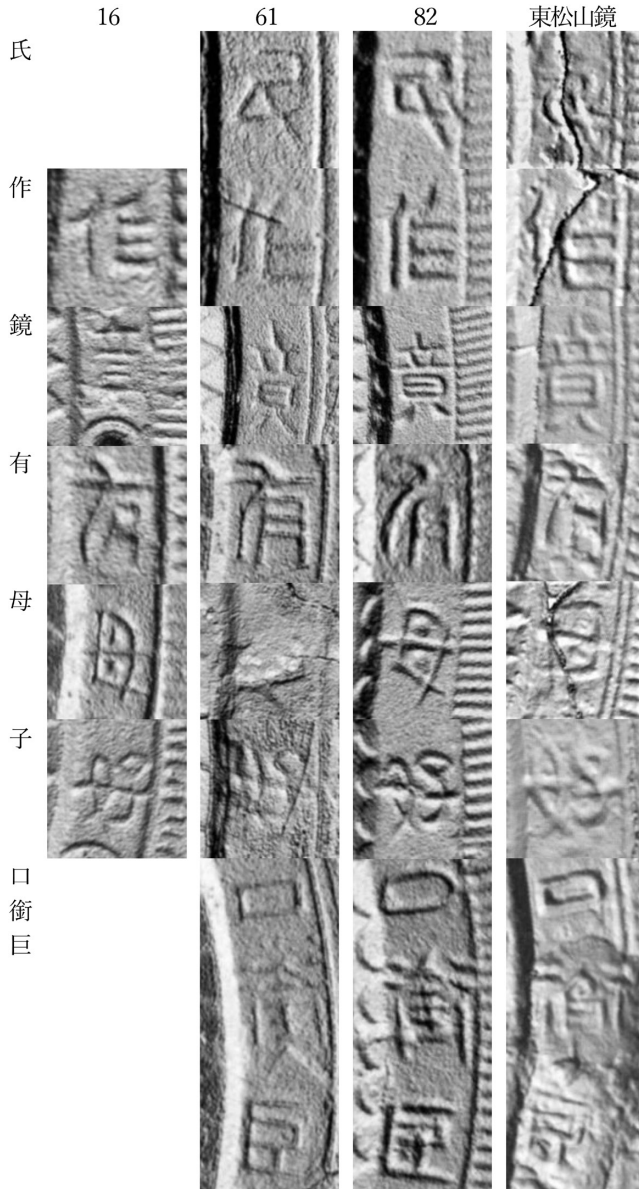


図 34 陳氏Ⅳの字形

- (11) 陳氏Ⅴ  
 目録番号：13・14・15・17 鏡  
 表現：⑧  
 字形タイプ：吾…半円 a 類 氏…二本 / 逆類  
 作…斜類 鏡…無 / ハ類 有…沿 b 類  
 母…無し 子…曲線類 天…天類  
 その他の共通点：「用青同」の銘句  
 銘帯を区切る乳

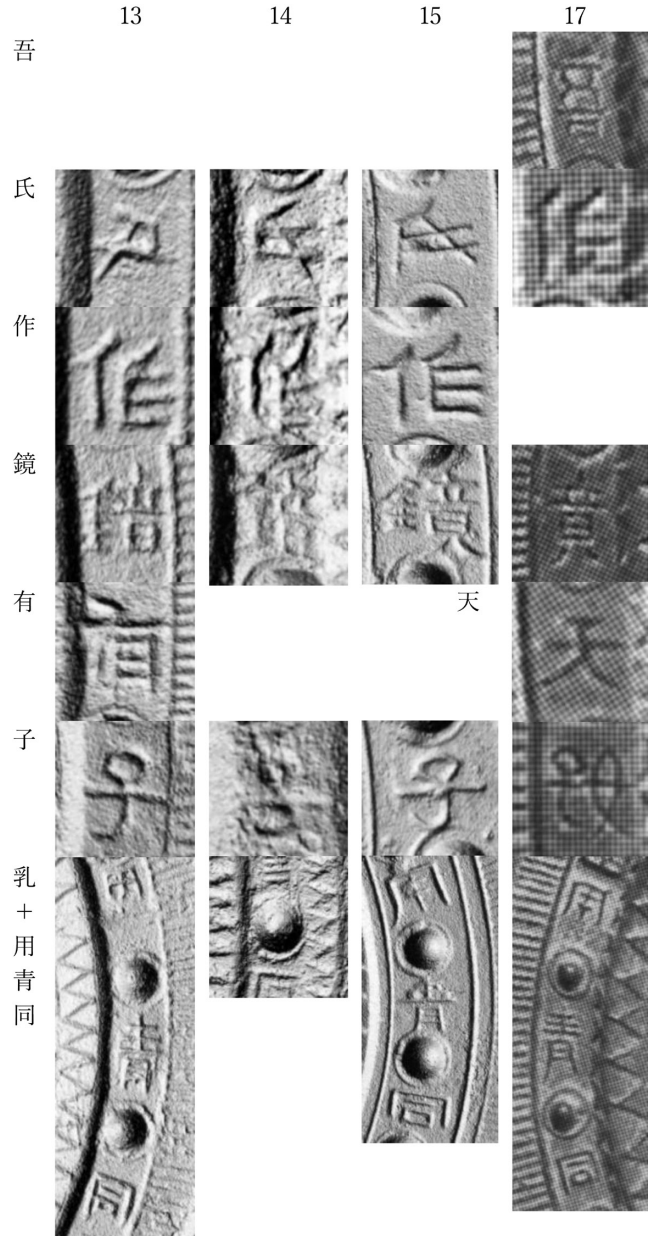


図 35 陳氏Ⅴの字形

表 14 陳氏Ⅳの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡 | 有  | 母  | 子  | 天 |
|------|-----|---|---|---|----|----|----|---|
| 16   |     |   | 斜 | ハ | 沿b | 端b | 曲線 |   |
| 61   |     | 民 | 斜 | ハ | 沿b | 不明 | 曲線 |   |
| 82   |     | 民 | 斜 | ハ | 沿b | 端b | 曲線 |   |
| 東松山鏡 |     | 民 | 斜 | ハ | 沿b | 端b | 曲線 |   |

表 15 陳氏Ⅴの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏  | 作 | 鏡 | 有  | 母 | 子  | 天 |
|------|-----|----|---|---|----|---|----|---|
| 13   |     | 逆  | 斜 | 無 | 沿b |   | 曲線 |   |
| 14   |     | 二本 | 斜 | 無 |    |   | 曲線 |   |
| 15   |     | 二本 | 斜 | ハ |    |   | 曲線 |   |
| 17   | 半円a |    | 斜 | ハ |    |   | 曲線 | 天 |

- (12) 後張氏  
 目録番号：53・62 鏡  
 表現：⑨  
 字形タイプ：吾…無し 氏…無し 作…点類  
 鏡…人/ハ類 有…払c類 母…無し  
 子…三角類 天…無し  
 その他の共通点：張是作鏡銘がある

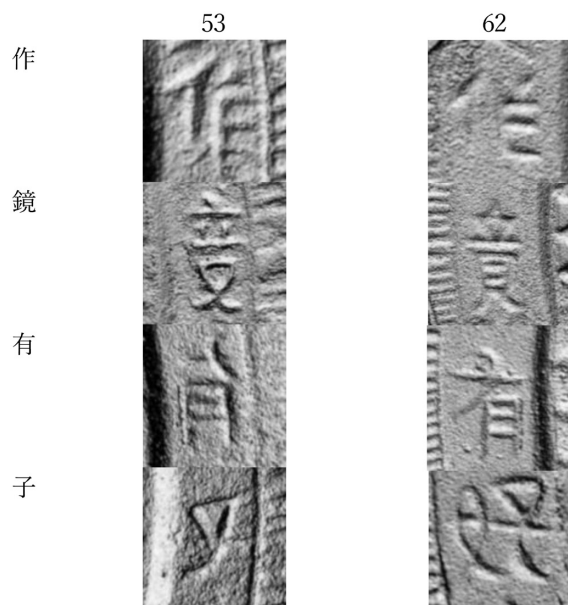


図 36 後張氏の字形

表 16 陳氏Vの字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡 | 有  | 母 | 子  | 天 |
|------|-----|---|---|---|----|---|----|---|
| 53   |     |   | 点 | 人 | 払c |   | 三角 |   |
| 62   |     |   | 点 | ハ | 払c |   | 三角 |   |

- (13) 天系  
 目録番号：46・68 鏡  
 表現型：②  
 字形タイプ：吾…無し 氏…無し 作…無し  
 鏡…無し 有…無し 母…無し  
 子…無し 天…天類  
 その他の共通点：「天王日月」4文字を、正方形の方格に書く

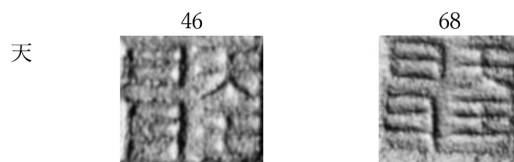


図 37 天系の字形

表 17 天系の字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡 | 有 | 母 | 子 | 天 |
|------|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| 46   |     |   |   |   |   |   |   | 天 |
| 68   |     |   |   |   |   |   |   | 天 |

- (14) 元系  
 目録番号：69・70・71・74・75・77 鏡  
 表現：②  
 字形タイプ：吾…無し 氏…無し 作…無し  
 鏡…無し 有…無し 母…無し  
 子…無し 天…元類  
 その他の共通点：「天王」・「日月」を2文字ずつ、長方形の方格に書く

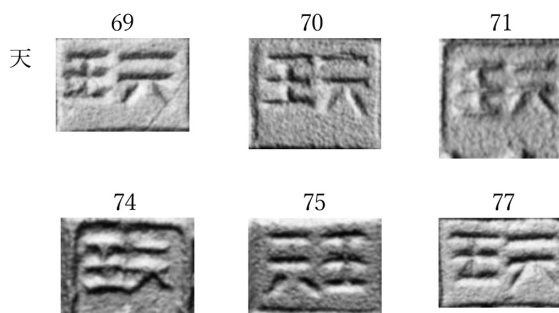


図 38 元系の字形

表 18 元系の字形タイプ

| 目録番号 | 吾・五 | 氏 | 作 | 鏡 | 有 | 母 | 子 | 天 |
|------|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| 69   |     |   |   |   |   |   |   | 元 |
| 70   |     |   |   |   |   |   |   | 元 |
| 71   |     |   |   |   |   |   |   | 元 |
| 74   |     |   |   |   |   |   |   | 元 |
| 75   |     |   |   |   |   |   |   | 元 |
| 77   |     |   |   |   |   |   |   | 元 |

## 7-2-2. 工人間での違いとつながり

前項では字形タイプの纏まりによって14人の工人を特定したが、字形だけでは単なる偶然の一致の可能性も考えられる。そのため、これまで工人群の根拠とされてきた図像やその他の要素が、同一工人の鏡同士や異なる工人間の鏡でどのような様相を呈しているのかを分析することで、工人差を確認していくこととする。またそれと同時に、文字や図像から見られる工人間の関わりも指摘する。

### 7-2-2-1. 張氏と表現①、表現⑭

まず、張氏Ⅰ～Ⅳの4人の工人について考察するが、銘文中で実際に「張氏」と書かれているのは張氏Ⅱだけであり、張氏Ⅰ・Ⅲ・Ⅳは表現①の鏡群を含む点で張氏Ⅱと共通するため「張氏」と仮に命名した。

表現①は1つの表現で括られていることからわかるように図像は似通っており、写実的な神像が特徴である（岸本1989）。つまり、張氏Ⅰ～Ⅳの鏡は図像的には類似している。しかしながら、細部を見ると異なる点も多い。例えば、傘松文の蓮華座が精巧な張



図 39 張氏 II・III の画像比較（上：34 鏡 下：35 鏡）

氏 II の 34 鏡に対し、花卉の数は同じものの張氏 III の 35 鏡は明らかに稚拙である（図 39）。この 2 面は神獣像や傘松文のみならず、乳の配置や獣像の足や尾の形などが明らかに類似している。しかし字形タイプや精粗に大きな違いがあることから考えて、この 2 面は同じ構図案を持った張氏 II と張氏 III によって作られたか、片方がもう一方の鏡から構図を真似たと考えるのが妥当であろう。「作」編年的には稚拙な張氏 III が点類で、精巧な斜類の張氏 II に先行するが、問題となる 34 鏡は同範鏡全てで「作」の字形が不明瞭で点類か斜類か判別できないため、この 2 面の時期的な関係は判断できない。

張氏 I と II の鏡に関しては様々な要素において明確な違いが見いだせる。図像配置から見ると張氏 I の 29-30 鏡と 30 鏡は環状乳式で 31 鏡が特殊配置であり、これら 3 面の神像は獣像の上に単独で描かれている点で共通している一方、張氏 II の 21 鏡は配置 B で 34 鏡が配置 A と複像式の配置をしており、22 鏡も配置 U であるが複像式的な横並びの神像が描かれている点で共通する（図 40）。さらに鈕座を見ると、張氏 I は全て有節重弧文であるが、張氏 II は全て連珠文であるという明確な違いもある（図 41）。しかも、神獣像表現が表現①と異なり、同一工人と認定しづらい 29-30 鏡が、有節重弧文の途中に 4 つの小乳を入れるという珍しい特徴を 31 鏡と共通している点でも、張氏 I に含めてよいだろう。また、岩本崇の注目する外区形態でも、張氏 I は縁が明瞭でない 1 式であり、張氏 II は小さく縁が立つ 2 式であるという違いが見られる（図 42）。

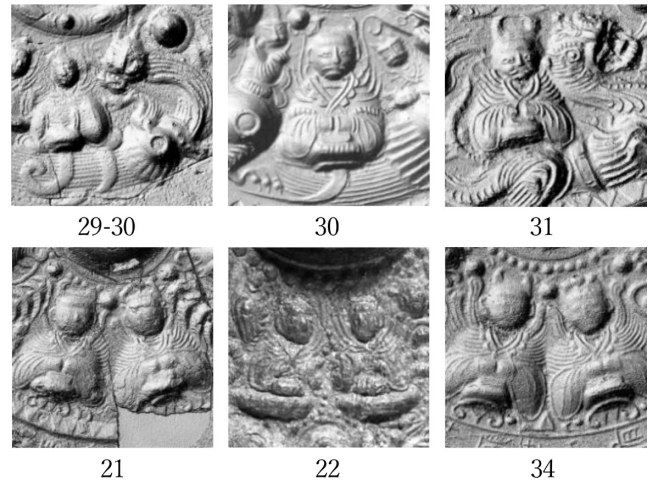


図 40 張氏 I（上段）と張氏 II（下段）の神像配置

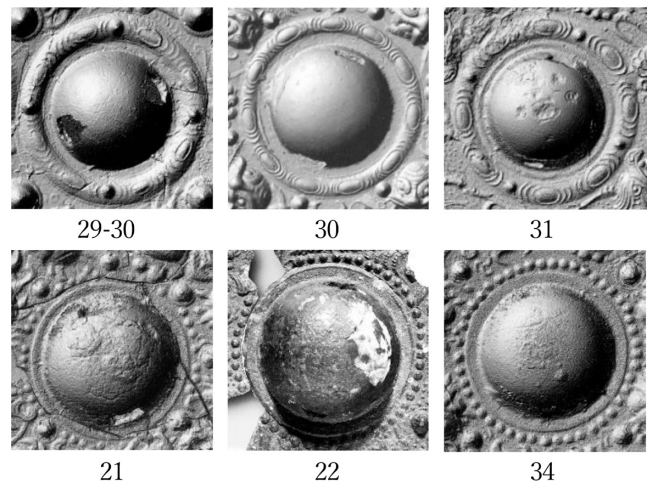


図 41 張氏 I（上段）と張氏 II（下段）の鈕座



図 42 張氏 I（30 鏡）と張氏 II（21 鏡）の外区形態

張氏 III の鏡は、張氏 II に対して粗であると前述したが、それ以外に大きな特徴がある。張氏 I・II・IV の鏡が三角縁神獣鏡に一般的な直径 22 ～ 23 cm 前後であるのに対して、張氏 III の 2 面は 35 鏡が 20 cm 弱で 36 鏡が約 18 cm と小型の鏡であるという特徴を持つ。

最後に張氏 IV だが、張氏 IV の鏡には表現①のみならず表現④の 37 鏡が含まれる。その他の表現④の大半は字形タイプから徐州銘系として纏められるが、徐州銘を持つ表現④はこれまでも図像表現の類似性などから表現①～③とのつながりが指摘されてきた（岸本 1989）。また、表現①の王氏作の 79 鏡に表現④と類似した「同出徐州」の文字があることから、表現④は王氏作鏡である可能性も指摘されてきた（林 1998）。

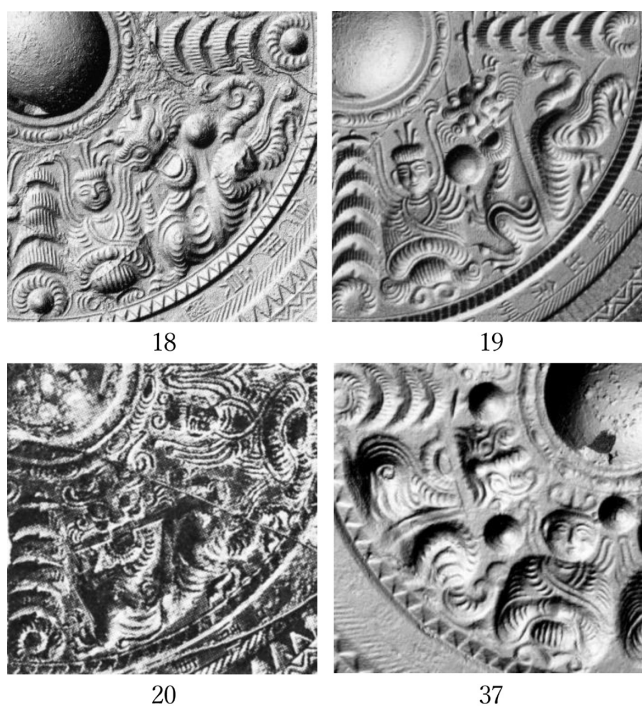


図 43 徐州銘系と張氏Ⅳの 37 鏡の比較

字形からこのつながりを考えると、王氏の「子」が三角類で、徐州銘系が曲線類であり、銘式自体も大きく異なるため、徐州銘系が王氏とは考えられない。

では、張氏Ⅳと徐州銘系は同一工人なのだろうか。張氏Ⅳの 37 鏡の銘文は徐州銘系の 4 面同様幽律三剛系の U 式である。この 2 つは字形的に見ても「子」が曲線類で一致し、「鏡」では張氏Ⅳが人類で徐州銘系がハ類と異なるが、徐州銘系のハ類は上の「日」部分に「儿」がくっついており、人類に近いハ類である。しかし、張氏Ⅳの 37 鏡と徐州銘系の 4 面とは図像が細かい部分で異なる（図 43）。徐州銘系の鏡は傘松文で 4 区画に分け、神像は顔が縦長で頭に横長の帽子状のものを被り雲気を衿から伸ばし、獣像の眉を横に伸ばす。一方 37 鏡には傘松文が 1 つしかなく、神像の顔は丸顔で帽子状のものは無く雲気は肩から伸ばし、獣像の眉は Y 字に伸びている。こうした違いからも、別工人と言えるだろう。37 鏡の丸顔の神像などの特徴は表現①に類似しており、張氏Ⅳが表現①の鏡も作っていることの表れであろう。別工人であったが、表現①を作る張氏Ⅳが、徐州銘系の鏡と銘文・図像が類似する鏡を作ったことは事実であり、またどちらも「作」が点類であることから表現①と表現④、張氏Ⅳと徐州銘系の関係性や製作時期の近さが窺われる。

徐州銘系に関しては、「母」の端 a 類が張氏Ⅰの 29-30 鏡や 31 鏡などと共通するが、この字形タイプは陳氏作鏡群では現れない字形タイプであり、徐州銘系の鏡の四神四獣鏡群との関係性の深さを示している。また、徐州銘の無い 39 鏡もこれまで徐州銘系と同じ表現④とされてきた。おそらく張氏Ⅳの 37 鏡と

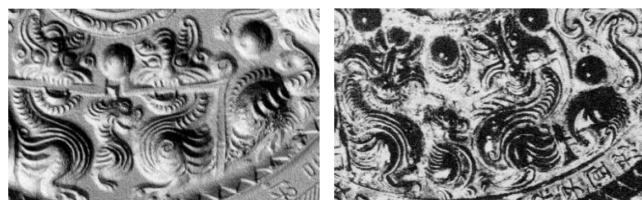


図 44 37 鏡（左）と 39 鏡（右）の図像の類似



図 45 39 鏡（左・右上）と 40 鏡（中央・右下）の類似

1 本のみ傘松文や獣像に挟まれた小獣像、尾緒の様に二股に分かれる獣像の尾などの図像や構図が類似しているからだと思われるが（図 44）、39 鏡の「子」は三角類であり、曲線類の張氏Ⅳや徐州銘系とは異なる工人によるものと考えられる。図像から見ても、獣像の尾の文様や間隙の浮き彫りなどの共通から表現④とするのが妥当であろう<sup>9)</sup>。字形から見ても、表現④の 40 鏡と特殊な形をした「右」が共通している（図 45）。39 鏡の「母」も端 a 類であり、二神二獣鏡群の表現④であったとしても、やはり徐州銘系や四神四獣鏡群との関連性が窺え、37 鏡と 39 鏡は、同じ構図から別々の工人が作ったか、一方の鏡から別の工人が構図を真似て作ったと考えられる。

## 7-2-2-2. 陳氏作鏡群と表現④、表現⑦

次に陳氏作鏡群について考える。今回、陳氏作鏡群の中で陳氏Ⅰ～Ⅴと後張氏の 6 工人を特定したが、これまで陳氏作鏡群を担う工人は少数だと考えられてきた。先述のように西田守夫は、「各種の陳氏作鏡の銘文は書体が似ていて、ほとんど同一人、少なくとも同時代の製作による」（西田 1971：202）と指摘し、陳氏Ⅲの 32 鏡が陳氏Ⅳの 59・61・82 鏡や 25・58 鏡と「殆んど同文で、特に書体には特徴があって、同一人が書いたとしか考えられ難い程、よく似ている」（西田 1971：232）と指摘している。しかし字形タイプから見ると、陳氏Ⅱと陳氏Ⅲや 25 鏡は「母」の字形タイプが異なり、陳氏の中にも複数の工人差や時期差があることがわかる。

まず陳氏Ⅰとした年号鏡群であるが、これまで指摘されてきた、年号がある・銘文内容が独特・図像表現が同向式であるという特異性以外にも「有」の字形タイプから見ると、その他の陳氏作鏡のほとんどが沿 b か払 a 類であるのに対して、陳氏Ⅰは払 b 類であり、

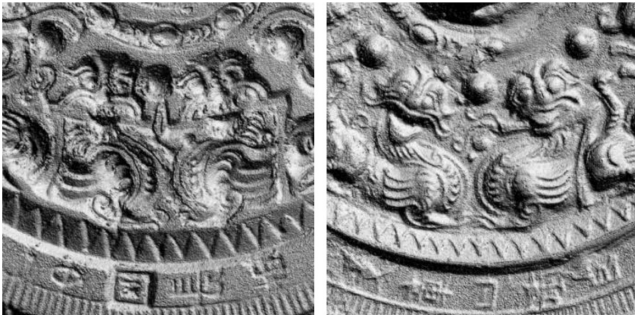


図 46 52-53 鏡 (左) と 52 鏡 (右) の図像の類似

字形タイプからもその特異性が見え、他の陳氏鏡群との工人の差が認められる。

唯一払 b 類を持つ 52-53 鏡だが、この払 b 類の「有」は高まりに書かれているように見え、奈良県黒塚古墳出土 25 号鏡の観察でも突出が確認されている(奈良県立橿原考古学研究所編 2010)。ここで思い出されるのが、「異筆の後刻」(笠野 1984: 7)とされた 32 鏡の「有」である。同じく浮いた鏡胎の上に書かれた「有」は払 b 類であった。52-53 鏡は「吾」の半円 a 類や渦巻き状の「兮」、長銘文の途中の方格に「位至三公」という短銘文を外向きに入れる手法、神獣像の類似などが沿 b 類を用いる陳氏Ⅲの 52 鏡に酷似している(図 46)。よって、52-53 鏡の「有」払 b 類も後刻の異筆であり、それ以外の特徴から陳氏Ⅲに相当すると考えられる。また、陳氏Ⅲの 2 面の鏡に後刻された文字の字形タイプが一致する点にも重要な意味があるように思われる。

陳氏Ⅱ～Ⅴに関しては、工人ごとの図像的特徴と共に、前節で導いた編年と神獣像表現の図像的変遷を踏まえ、判断の難しい鏡も含めながら、工人間の関係・変遷も追うことにする(図 60)。

陳氏Ⅰを除いた陳氏作鏡群の中で「作」が点類なのは、陳氏Ⅱの 26・27・50・98 鏡と陳氏Ⅲの 33 鏡、そして 25 鏡である。表現は 25・26・27・33 鏡が表現⑦で 50・98 は表現⑩である。表現⑦が陳氏作鏡群の中で最古段階にあるというのは、傘松文分類(新納 19991)を基に表現⑥より表現⑦を古く修正した岸本編年(岸本 1995)と一致する。

同じ表現で纏められた表現⑦の中でも、図像的にほぼ一致するのが、25 鏡と陳氏Ⅱの 26 鏡である。どちらも配置 B で一致し、特に獣像が酷似する。顔が際立って大きい 1 体とその右に側立つ小さな 1 体の獣像、それらに對置する一対の獣像の左側の獣像の目元の羽毛のみが縦に書かれる点、その他様々な部分で類似点が見られる(図 47)。しかしながら、全体として 25 鏡は彫りが深いので隙間が少なく立体的で、傘松文も精緻であるのに対し、26 鏡は獣像の顔の輪郭がはっきりしないほど彫りが浅いため隙間が多く、傘松文も小さく

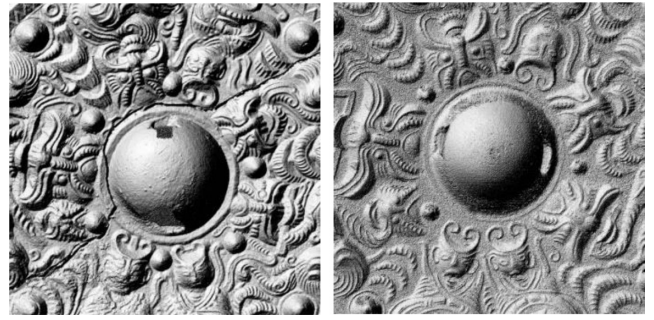


図 47 25 鏡 (左) と 26 鏡 (右) の図像比較

簡素であるという大きな違いがある。字形タイプから見ても、「有」が払 a 類・「鏡」が人類である 26 鏡に対し、25 鏡は「有」は沿 b 類・「鏡」はハ類であるなど、同一工人の作とは言えない。この両面に関しても、これまでのケース同様、同じ構図から異なる工人が作ったか、一方の鏡から別の工人が構図を真似たと考えられる。こういったケースが三角縁神獣鏡で複数件存在することは、これまで大雑把な図像や配置の類似から「同じ工人単位」(岸本 2012: 46)を推測してきたことを見直す必要があることを示している。

25 鏡は位置づけが難しく、「有」「鏡」「口銜巨」の字形タイプや図像の彫りの深さ、獣像の尾の文様などからして陳氏Ⅲの 33 鏡にかなり近いが、「母」字形タイプが端 b 類であり、中 a 類である陳氏Ⅲの鏡とは言えない。そのため陳氏Ⅲの 33 鏡とは別工人の作であり、独立した鏡と考えている。

陳氏Ⅲの 33 鏡は上記の通り 25 鏡と「母」字で異なり、陳氏Ⅱの 26 鏡と字形タイプ以外にも図像の彫りの深さや隙間の少なさ、傘松文の精緻さなどで異なる点からも別工人の鏡と言えるだろう。

最後に 27 鏡であるが、配置 B で複数の獣像の目元の羽毛が縦に描かれる点からして、26 鏡のデザインの影響を窺わせる。字形タイプと図像から見て、26 鏡と同じ陳氏Ⅱによる鏡と考えてよいだろう。

以上の図像・字形タイプの比較から、「作」字の点段階に陳氏Ⅱ・陳氏Ⅲ・25 鏡作工人の 3 工人が表現⑦で纏められる鏡群を作っていたことがわかった。そして陳氏Ⅱは表現⑦を離れ、表現⑩というこれまで陳氏作鏡群に含まれてこなかったほど図像のかけ離れた鏡群の製作を点段階のうちに始めたと考えられる。表現⑩は振文座乳を採用している点から、より新しく考えた(福永 2005)。表現⑩は文字から見て、表現⑦の 26・27 鏡と特異な「吾」「有」「鏡」の字形タイプが一致するだけではなく、「来」の文字が他の陳氏作鏡群で採用される字形とは大きく異なる点で共通する(図 48)。26・98 鏡の「来」は「来」を上下に 2 つ重ねたような字形であるのに対し、陳氏Ⅲの 67 鏡・陳氏Ⅳの 82 鏡の「来」は「未」に横棒を 2 本増やし

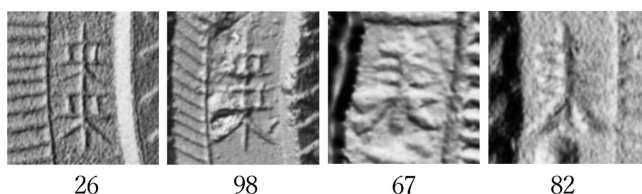


図 48 「秦」比較

たような字形になっている。また、図像から見ても表現⑦に表現⑦とのつながりが見られるが、これに関しては後述する。以上のことから、表現⑦の鏡群は陳氏Ⅱの鏡であり、陳氏作鏡群の最古段階の鏡群と考えられる。

「作」字の斜段階に入ると、陳氏Ⅱや 25 鏡作工人は見られなくなり、点段階では 33 鏡のみだった陳氏Ⅲが精力的に表現⑦を作り続けていったことが、表現⑦の斜段階の鏡が 32・32-33・52・52-53・67 鏡と全て陳氏Ⅲの鏡であることからわかる。これらの鏡は表現⑦として図像的に類似するのみならず、33 鏡の特徴とした彫りの深さや隙間の少なさ、傘松文の精緻さなどで共通しており、字形タイプと図像どちらも共通することから見て同一工人の鏡と言ってよいだろう。

ただ、これまで見てきた各工人の鏡とは異なり、陳氏Ⅲの鏡の中では一定の方向への図像の変化が認められる（図 49）。25 鏡や 33 鏡などの点段階の表現⑦の獣像は、目元の羽毛を持つ龍のみで構成されていた。斜段階の中でも 67 鏡はこれを踏襲しており、獣像の吊り上がる目尻なども 33 鏡に類似するため、斜類の中では最も古い鏡と考えられる。変化が起これるのは 32 鏡である。32 鏡は 4 体の獣像を配置するが、そのうち 1 体は従来通りの目元に羽毛を持つ龍である一方、2 体は目元に羽毛がない龍であり、そして残りの 1 体は眉が垂れ下がる虎である。この傾向は、32

鏡と図像の面で共通性が強いと指摘されている 32-33 鏡（岸本 2012<sup>10)</sup>）にも見られ、4 体の獣像のうち 1 体が 32 鏡と類似した虎である。そして遂に陳氏Ⅲは獣像 4 体全てがこの虎で構成される 52・52-53 鏡を創出した。岩本はこの 52・52-53 鏡に関して、龍の多い表現⑦に対し虎のみであることや、長銘文の途中に吉祥句の入る方格を挿入する方法が表現⑥と共通するとして表現⑥に含めることを提案するが（岩本 2008）、字形タイプからみて表現⑦を担う陳氏Ⅲの鏡であり、図像的にもこの 2 面の虎は 32 鏡に始まる獣像の変化の結果生まれたものと考えられるため、表現⑦の範疇に含めたままで良いと思われる。しかし銘帯の方格に関しては、表現⑥の影響と考えるのは妥当である。この 2 面が獣像の変化から見て表現⑦の最新段階の鏡であることから考えると、表現⑦の最新段階と表現⑦に後続する表現⑥の製作時期の一部が被っていたために影響を受けたと推測される。これは 52-53 鏡の傘松文が 3 式と新しいこととも整合的である。52 鏡の獣像の口が上に大きく開くのも表現⑥の影響といえるかもしれない。

この突然現れる陳氏Ⅲの虎の図像の由来として、陳氏Ⅱの表現⑦の獣像が想定される（図 49）。岸本は配置 A である表現①や④との関連を想定しているが（岸本 2012）、表現⑦の 3 面のうち 2 面は配置 A である。図像的にも、表現④の 44 鏡は 32 鏡の虎と眉毛が類似してはいるが、表現⑦の 50 鏡と 52・52-53 鏡の垂れ下がる眉や鼻筋の横縞文様の類似、表現⑦が表現⑦も作った陳氏Ⅱの鏡であることから考えて、これらの虎は点段階の表現⑦に起源をもつと考えられる<sup>11)</sup>。

表現⑦に後続し表現⑧より新しいとされる表現⑥（岸本 1995）には画文帯や獣文帯が多く、長銘文を持つ鏡は 54・58・59 鏡のみであり、分析がしづらい。

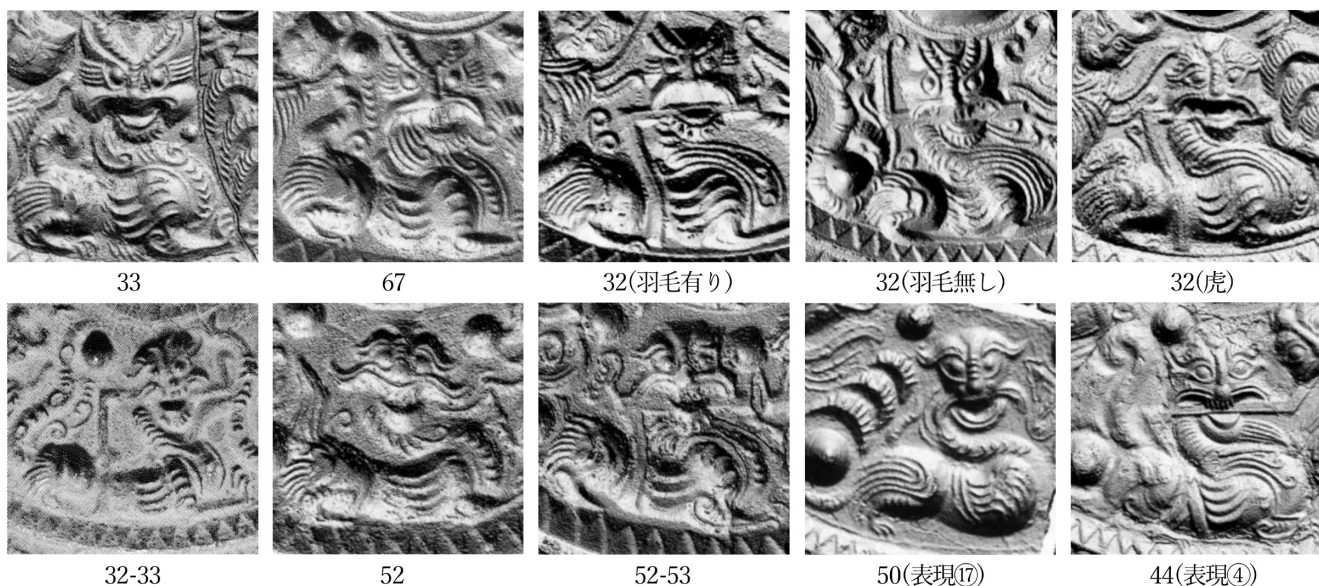


図 49 陳氏Ⅲの獣像の変化と表現⑦・④

特に 54 鏡は銘文・図像共に特殊かつ不鮮明で、字形タイプの的にも特定の工人と比較できないため、本論では扱わない<sup>12)</sup>。

58 鏡は陳氏の工人区別に重要な「母」字が無く、「口銜巨」の文字も同範鏡全てで欠損もしくは不鮮明のため判断できない。他の字形タイプの的にも陳氏Ⅲ・Ⅳ・Ⅴのどれにも当てはまるため、こういった工人かは不明である。ただ、車崎の指摘する「神守」と「戲守」の銘句選択の差（車崎 2017）が工人の差であった場合、58 鏡は「戲守」を用いるため、同様の 61・82・東松山鏡を製作した陳氏Ⅳの作となる。58 鏡の図像は表現⑥に典型的な口を上大きく広げる獣像と三神構造の神像であり、表現⑥の獣像と同じ顔を採用する 82 鏡や三神構成をとる 61 鏡とつながりは深く、58 鏡と 82 鏡は車輪圈座乳を持つ点でも共通する（図 50）。よって、58 鏡は字形タイプの的にも図像的にも陳氏Ⅳの鏡の可能性のある鏡という位置付けとする。「口銜巨」の鮮明な同範鏡の発見が望まれる。

59 鏡は「母」が端 b 類のため、可能性としては 25 鏡作工人か陳氏Ⅳである。しかし、「口銜巨」の字形タイプを比較すると、25 鏡とは「口」で、陳氏Ⅳとは「巨」で異なるため、これらと同一工人とは断定できない（図 51）。59 鏡の図像は、神像は三神構造をとっているが獣像が 58 鏡のような典型的なものでなく、龍虎の表現は先に見た陳氏Ⅲの獣像に類似する（図 51）。しかし「母」の字形タイプが異なるので、陳氏Ⅲに含めることもできない。銘句選択では「神守」を用いており、この点でも陳氏Ⅲと共通する。以上のことから、59 鏡は陳氏Ⅲの最新段階の 52・52-53 鏡と並行して別工人によって作られた鏡であり、陳氏Ⅲとの交流の中で 59 鏡工人は陳氏Ⅲの獣像を、陳氏Ⅲは表現⑥の銘帯内の方格の手法を取り入れたという関係性が導かれる。

最後に、表現⑥に後続する表現⑧であるが、この鏡群は陳氏Ⅳの 61・82・東松山鏡と陳氏Ⅴの 13・14・15・17 鏡と 2 人の工人に分けることができる。さらに陳氏Ⅳの鏡として、表現④の 16 鏡も加えられる。16 鏡は表現④ではなく表現⑧であるという意見もあり（車崎 2017）、規格からも他の表現⑧と同じ G 群に纏められており（岩本 2008）、表現⑧との関連性が多い鏡である。

これらの陳氏ⅣとⅤの鏡は、字形タイプの違い以外にも図像的に明確に分かれる。

陳氏Ⅳは特異な民類の「氏」や端 b 類の「母」、「口銜巨」の字形タイプなどで一致した鏡だが、図像的には表現⑥の影響を受けていることは前述した。それ以外にも獣像配置において 16・82・東松山鏡は 2 体の獣像が鈕を挟んで走る配置 H で共通する。61 鏡は配置 A' であるが、配置 H の一方の獣像を 2 体にしたも

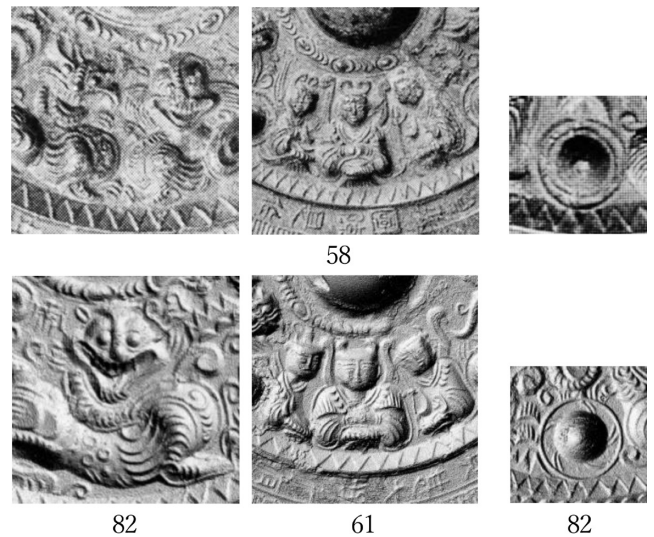


図 50 58 鏡と 61・82 鏡の図像比較

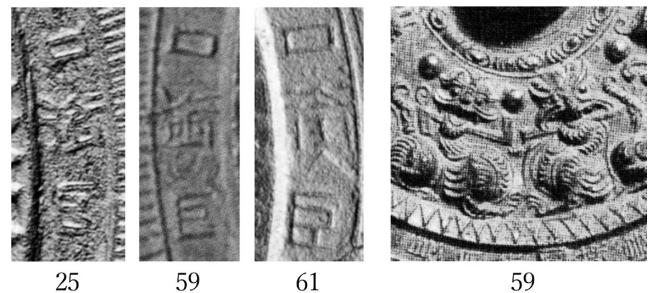


図 51 59 鏡の「口銜巨」と獣像

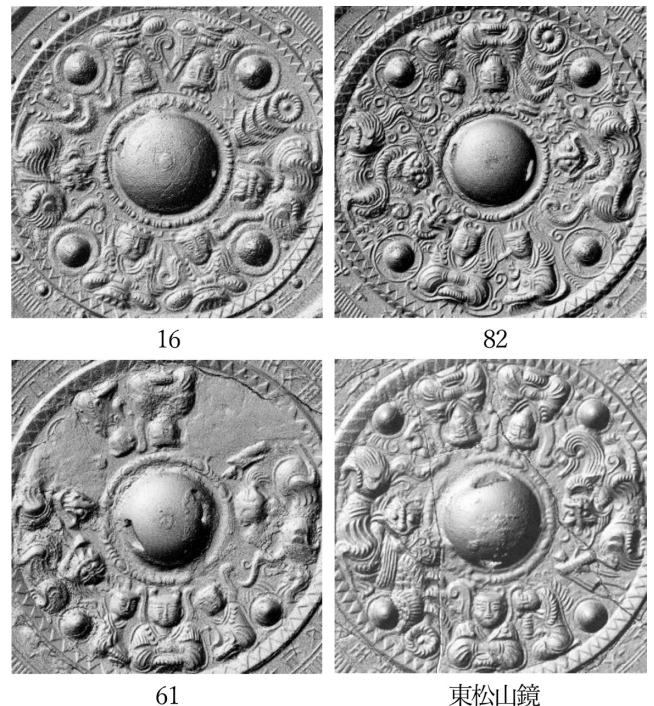


図 52 陳氏Ⅳの鏡の配置比較

のと考えられる(図52)。この配置Hは表現④や⑤の二神二獣鏡群の影響とみられ、16鏡が表現④と考えられている所からもそれらとの関連性が窺われる。

細かい図像の一致を見ていくと、61鏡と東松山鏡は画像鏡に由来する羽仙(西田1971)が獣像の側に立つ点で一致し(図53)、二神二獣鏡群が画像鏡に起源をもつとされていることから(岸本1989)表現④と⑤の影響と考えられる。東松山鏡の獣像のうち、1体は82鏡同様表現⑥の流用であるが、もう1体は16鏡の獣像と、吊り上がる目尻や鬚が顎下から垂れる様子、長い腕の手の表現などが類似する(図54)。これも表現④によく見られる獣像表現である。82鏡は獣像から出るシダ状の雲気を多く表現しているが、この端緒とみられる表現が16鏡の獣像の尾に見られ



東松山鏡

61

神人龍虎画像鏡

図53 画像鏡由来の羽仙



図54 東松山鏡(左)と16鏡(右)の獣像の類似

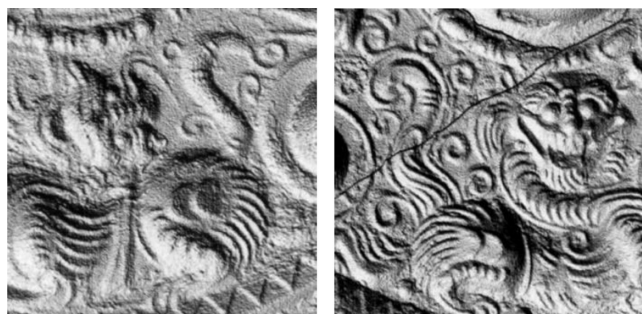


図55 16(左)と82鏡(右)に見られる雲気



東松山鏡

82

87(表現④)

図56 珍図紋の類似

る(図55)。また、「鋸歯紋と雲気紋で構成される珍しい図紋」(車崎2017:168)が82鏡では虎の横に、東松山鏡では虎の顔の前に後刻されている(図56)。この図紋は、表現④に多い間隙の浮き彫りとその斜面に書かれる鋸歯文や連弧文が、先に指摘したシダ状の雲気と合体したものと考えられる。

この82鏡と東松山鏡は挽型の共有が指摘されており、「近い関係を持つ、もしくは同一の工人集団で製作」(水野2017:138)されたと想定されていたが、同一工人の鏡であったためと考えれば納得がいく。挽型の共有と工人が一致するという現象は、陳氏Ⅲの32鏡と33鏡、元系の74鏡と75鏡と77鏡でも起こっている(水野・奥山2012)。これらの事例では、挽型の共有が同一工人を示していたが、挽型の共有が工人とどんな関係があるかといった問題は、今後の課題である。

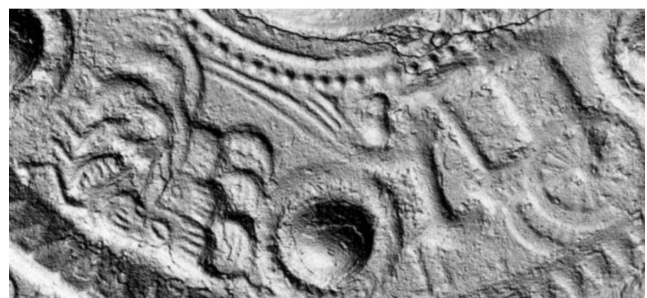
陳氏Ⅳの鏡の図像が表現④と表現⑥の要素の融合によって成り立っていることが分かったが、この4面の製作順序は、表現⑥の特徴を色濃く残す61鏡と表現④とされる16鏡が始めに作られ、挽型を共有する82鏡と東松山鏡が次いで作られたと考えられる。

次に陳氏Ⅴの13・14・15・17鏡だが、この鏡は多少字形タイプに例外を持つものの、「用青同」の銘句を使用する点や銘文を小乳で区切る手法などが一致しており、さらに図像的類似が大きいと同一工人と考える。これらの鏡の図像類似は、特に13・14・15鏡において一見して明らかである。それは、画像鏡由来の車馬像(西田1971)を採用していることである。採用のみではなく、図像自体も酷似している(図57)。また神像でも、三山冠や双卷冠を付けない独自の頭の



15

13



14

図57 車馬像



図 58 特異な神像の類似

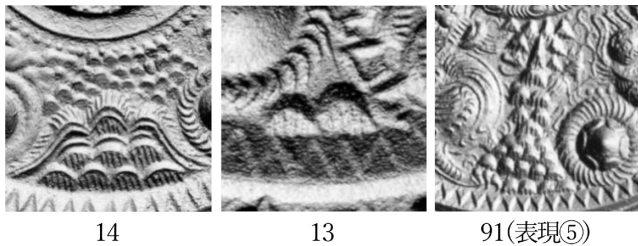


図 59 山岳文の採用

神像が採用される点で一致する(図 58)。このような神像は陳氏Ⅳの鏡にはなく表現④の一部に見られ、画像鏡由来の車馬像も含めて陳氏Ⅴも表現④との深いつながりが想定される。その他の図像として、14 鏡で 1 区画を占める山岳文も 13・15 鏡で僅かながら共有され、これも表現④や⑤の影響と考えられる(図 59)。

以上、陳氏作鏡群の中で、陳氏Ⅰ～Ⅴの鏡とその他数面を図像やその他の要素から考察したが、それによって、陳氏作鏡群に最低 5 工人が関わったことは確認できた(図 60)。しかし、陳氏作鏡群全体でみると、西田が指摘するように(西田 1971)、陳氏の字形が多くの部分で類似していることは事実である。特に「有」「鏡」「子」の字形タイプは、陳氏Ⅰと陳氏Ⅱの鏡を除き、陳氏作鏡群の中で沿 b 類・ハ類・曲線類で一致している。「母」などでの違いがあるため同一工人とは言えないが、「陳氏」で纏まる工人たちがこの様に一致した字形タイプであることは、この「陳氏」の工人としての性格に関係があるのかもしれない。また図像としては、全体として陳氏作鏡群は二神二獣鏡群の表現⑤や特に表現④との関りが強く、単なる工人間での交流以上の様相を呈していた。澤田秀実が指摘するように(澤田 1993)、二神二獣鏡群のあり方を再考する必要があるかもしれない。

### 7-2-2-3. 「天」と表現②・表現③

表現②の中に「元」となる「天」があることはこれまで指摘されてきた(笠野 1984; 岸本 1989)。一方、

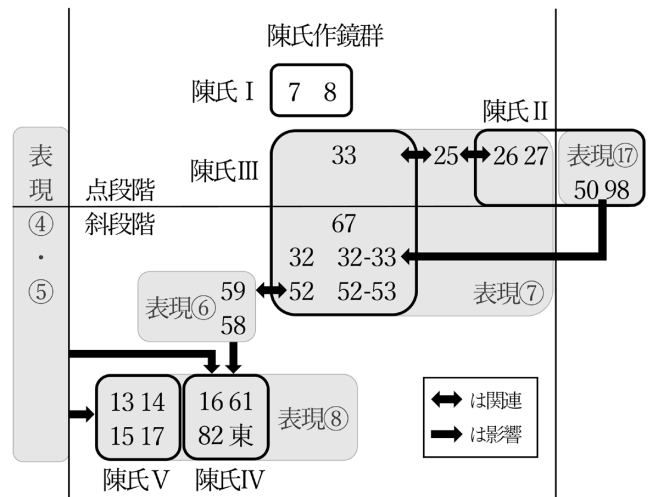


図 60 陳氏作鏡群まとめ

神像や獣文帯の図像の違いによっても工人差レベルまで分けられることも指摘されている(岸本 1989)。しかし、この 2 つを対応させて述べられることはなかった。岸本は神像の顔付きの一致から「同一工人の作品であることを認めてもよさそうな例」(岸本 1989: 20)として 46 鏡と 68 鏡を挙げる。そしてこの 2 面と 69・70・71・74・77 鏡とは、獣文帯の獣像表現と向きにも違いが見られ、工人差であると考えている(岸本 1989)。これは明らかに字形タイプから見た天系(46・68 鏡)と元系(69・70・71・74・75・77 鏡)の違いと一致している。

しかし天系と元系の図像の違いとして、岸本が指摘する特徴は正確ではない。獣文帯の表現を見ると(図 61)、天系の 46・68 鏡では長い角を持つ「横長で三角形の頭」(岸本 1989: 20)の獣像が内向き反時計回りに描かれ一致しているが、元系では 71・74・75 鏡が内向きで 69・70・77 鏡が外向きである。元系の獣像も「丸い顔に目を表す突起をもち口を突き出した獣像」(岸本 1989: 20)のみではなく多様性があり、岸本が含めなかった元系の 75 鏡では、他とは異なる精緻な獣像が描かれている。よって、他の図像における表現の差で工人差を確かめる必要がある。

まず神像を比較すると、岸本が指摘した顔の表現は天系と元系で冠表現や耳の大きさが異なるように見えるが客観性に欠ける。そこで裾の髪に注目すると、天系では S 字にうねるのに対し、元系では波文状に描かれているという明確な違いがみられる(図 62)。一方、内区の獣像にも違いがみられる。顔表現に注目すると、天系の獣像の目玉は太い眉と羽毛に囲まれているのに対し、元系の獣像は目玉と眉・羽毛の間に、目玉を囲む線が描かれるという違いがある(図 62)。天系と元系でこうした明らかな図像の異同があることから考えて初めて、2 人の工人を想定することができだろう。

これらの観点から他の表現②の鏡を考えてみると、

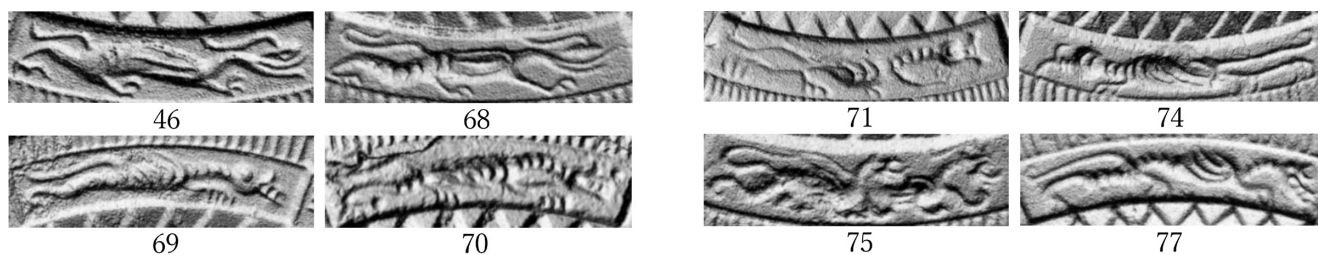


図 61 天系（46・68 鏡）と元系（69・70・71・74・75・77 鏡）の獣文帯

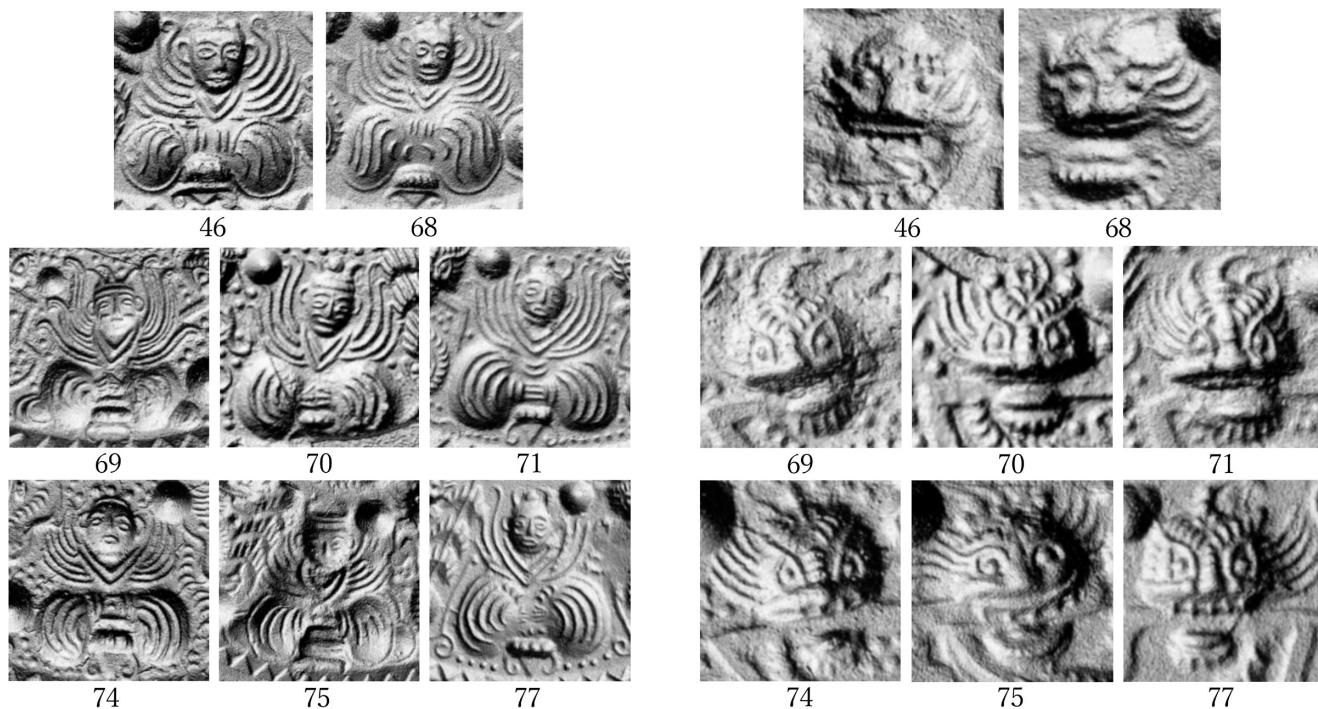


図 62 天系（上段）と元系（中・下段）の神獣像

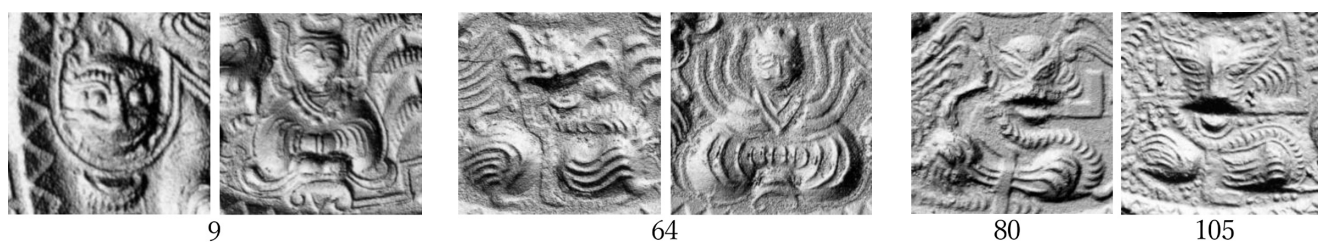


図 66 80 鏡の獣像と表現③

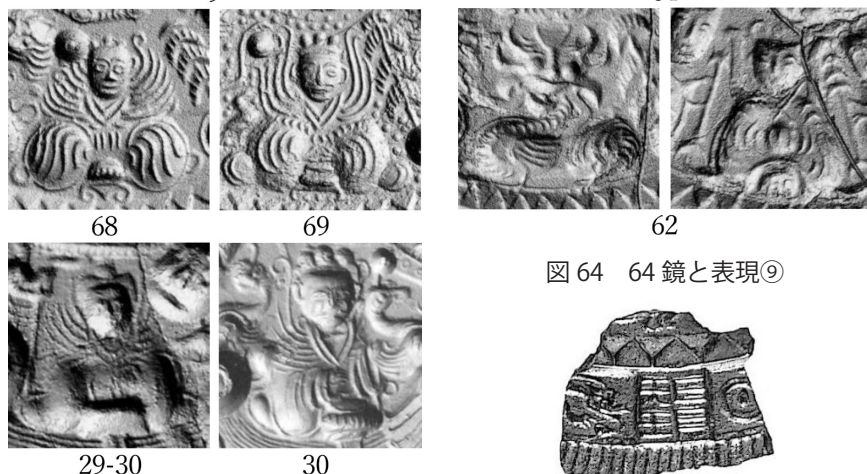


図 64 64 鏡と表現⑨



図 65 78 鏡片の銘文部分

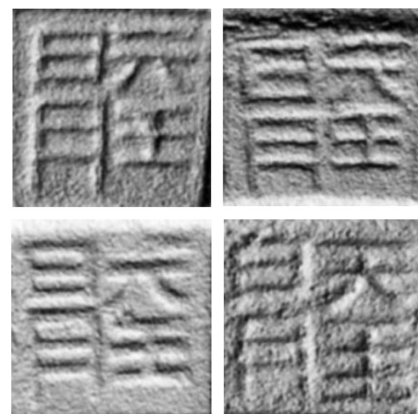


図 67 80 鏡の「天王日月」

図 63 9 鏡と脇の膨らみ

まず、元系の 75 鏡の手本と考えられている（岸本 1989）9 鏡だが、神像の裾は波文状であり、神獣の顔も目と眉の間に線が描かれており、確かに元系と一致する（図 63）。しかし、「天」字形タイプは天類である。よって、9 鏡は元系・天系と関係性はあるが、別工人によるものと考えられる。また、元系の 75 鏡や 69 鏡、天系の 68 鏡などの一部の神像の脇に見られる膨らみは 9 鏡の神座の雲気に由来すると考えられてきたが（岸本 1989）、これと同様の表現が表現①の張氏 I の 29-30 鏡や 30 鏡にも見られ（図 63）、張氏 I の図像的特徴とした有節重弧文の鈕座や神像の単独配置なども表現②と共通する。ただ、張氏 I の「天」は天類である一方で、神像の裾は波文状の線で描かれ元系と類似することから、天系や元系と同一工人とは言い難い。この膨らみの表現が張氏 I から表現②に受け継がれたのか、張氏 I と表現②の両方が 9 鏡の影響を受けたのかは、文字からは判断できないが、表現①と表現②の関連性の深さを示している。

次に 64 鏡だが、この鏡は表現②とされているものの、他の鏡とは大きく異なる。「天王日月」の銘文は小さな方格内を十字に区切った区画の中に書かれており、その小ささから今回は字形を判断出来なかった。神像は元系と同じ波文状の裾であるが、獣像は大きく角を伸ばし口が大きく開く龍が描かれており、配置 D という点でも他の表現②と異なる。図像的には表現⑨の 62・63 鏡と類似しており、こういった点から 64 鏡を表現②に含めるべきか、再考が必要だと思われる（図 64）。

最後に鏡片のみ<sup>13)</sup>の 78 鏡だが、残存する「天王日月」は天類である。内区は残っていないため獣文帯の獣像を見ると、天系の鏡とは異なる精緻な獣の頭である。これらのことから 78 鏡の内区は、精緻な獣文帯と天系の「天」で一致する 9 鏡に近い可能性がある（図 65）。

「天」の元系は表現③の 80 鏡にも存在することが知られており、表現②と表現③のつながりの根拠となっている（岸本 1989）。では 80 鏡は元系の鏡なのだろうか。獣像を比べると、80 鏡は目を大きく吊り上げており、元系の獣像とは類似しない（図 66）。これと同様の獣像が表現③の 105 鏡などにあるが、しかしそれらの「天」は天類である。そこで注目されるのが、80 鏡に書かれる 4 つの「天王日月」のうち、3 つが元類であるのに対し、1 つが天類であるという点である（図 67）。1 つ残った天類が本来 80 鏡を製作した工人の文字であり、その他 3 つの元類は何らかの原因によって銘文を元系の工人が書き換えたものではないかと推測される。80 鏡の天類の「天王日月」の「王」のみ横棒が 4 本になっているなどの違いもあり、別工人の文字と考えてよいだろう。よって、80 鏡は 105 鏡などと同一もしくは近い工人が製作し

たが、元系の工人が銘文を一部書き換えたと考えられる。なぜこうした現象が起きたのかは、表現③の位置付けと関わるのだろうが、表現③の「天」は 80 鏡を除き全て天類であることから、文字からは分析できない。ただ、三角縁神獣鏡の中で唯一「尚方作」と書かれた 99・100・100a 鏡も神像の下半身の共通から表現③とされており、その中でも 100a 鏡は「作」が点類で古く考えられるという点が注目されるが、これらの問題は稿を改めて検討したい。

## 8. おわりに

今回、三角縁神獣鏡の銘文の字形を分析することによって、2 段階の編年や複数の工人の存在を導き、その結果を既存の編年や図像表現・その他の要素と対応させながら検証しつつ、多少鏡群・工人同士の関係などにも触れたが、それ以上に広げることはできなかった。

編年に関しては、やはり実年代との対応を考える必要がある。実年代を与えるためには、今回の編年の根拠とした「作」の変化が実際に中国において起きたのか、起きた時期はいつ頃なのかといった問題を、本論では分析対象外とした同時代の中国鏡によって検証する必要がある。またその変化が斉一的なのか個人差が激しいのかという問題も今後考えるべき課題となるだろう。

工人に関しては、今回は各工人の字形・図像的特徴の把握と近接する鏡群・工人との関連に留まってしまったが、やはり編年と組み合わせる三角縁神獣鏡全体の生産の動向を工人レベルから明らかにする必要がある。しかしそのためには、文字だけでは対象となる鏡が少なすぎる。今回の様な文字の分析では、「天王日月」「君宜高官」などの吉祥句の短銘文のみの鏡や銘文がそもそも書かれない鏡は対象とすることができず、それらの位置づけが困難となる。特に、頼みの銘文がほぼ無い表現④や⑤は陳氏や張氏との関連が大きいにもかかわらず、文字がないため深い分析が行えなかった。表現③や表現⑨を含めて、今回明らかになった工人の性質などを考慮しつつ、図像を分析の中心として再考する必要があるだろう。また、今回特定の工人の鏡として扱えなかった鏡についても、新たに分析文字を増やすなどして再検討したい。

本論の字形分析は近年の水野敏典を中心とした三次元計測の研究成果によるところが大きい。ただし、凹凸が少なく薄い銘文は三次元計測画像では見えにくいという問題点があり、今回分析した中でも文字の薄さから字形タイプが曖昧な鏡が数面存在した。また、字形の曖昧な写真で分析したものも数面ある。今後実見させていただく機会があれば確認したい。

## 謝辞

本論は、2018 年 1 月に東京大学に提出した卒業論文を加筆修正したものである。本稿を草するにあたり、東京大学考古学研究室の大貫静夫名誉教授、設楽博己教授、佐藤宏之教授、福田正宏准教授、石川岳彦助教には数々のご指導を賜った。また鏡に関しては、早稲田大学の車崎正彦先生に数多くのご助言を頂いた。そして資料調査に関しては以下の諸氏・諸機関にお世

話になった。記して感謝の意を表したい。荒谷義樹 岡村弘子 小川泰樹 金田匡史 堂角田龍治 廣瀬時習 藤井康隆 森本徹 伊万里市歴史民俗資料館 大阪府立近つ飛鳥博物館 九州歴史資料館 洲本市立淡

表 19 文字を持つ全ての鏡の字形タイプ

| 工人     | 目録番号  | 吾・五 | 氏  | 作  | 鏡  | 有  | 母  | 子  | 天 |
|--------|-------|-----|----|----|----|----|----|----|---|
| 張氏 I   | 29-30 | 交差a |    | 点  | 不明 | 治a | 端a | 三角 |   |
| 張氏 I   | 30    | 交差a |    | 点  | ハ  | 治a |    | 三角 | 天 |
| 張氏 I   | 31    | 不明  |    | 不明 | ハ  | 治a | 端a | 三角 | 天 |
| 張氏 II  | 21    |     | 足長 | 斜  | 人  | 治a |    | 曲線 | 天 |
| 張氏 II  | 22    | 半円a |    | 斜  |    | 治a |    | 曲線 |   |
| 張氏 II  | 34    |     | 足長 | 不明 | 人  | 治a |    | 曲線 |   |
| 張氏 III | 35    | 交差a |    | 点  | 人  | 不明 |    | 三角 | 天 |
| 張氏 III | 36    | 交差a |    | 点  | 人  | 不明 |    | 三角 | 天 |
| 張氏 IV  | 23    | 半円b |    | 点  | 人  | 不明 |    | 曲線 | 天 |
| 張氏 IV  | 28    | 半円b |    | 点  | 不明 | 不明 |    | 不明 |   |
| 張氏 IV  | 37    | 半円b |    | 点  | 人  |    |    | 曲線 |   |
| 徐州銘系   | 18    |     |    | 点  | ハ  |    | 端a | 曲線 |   |
| 徐州銘系   | 18"   |     |    | 点  | ハ  | 払c | 端a | 曲線 |   |
| 徐州銘系   | 19    |     |    | 点  | ハ  | 払c |    | 曲線 |   |
| 徐州銘系   | 20    |     |    | 点  |    |    |    |    |   |
| 王氏     | 6     | 半円a | 普通 | 点  | 人  |    |    |    | 天 |
| 王氏     | 79    |     | 普通 | 点  | 人  |    |    | 三角 |   |
|        | 29    | 吾   |    | 点  |    |    | 端a |    | 天 |
|        | 36-37 | 吾   |    | 斜  | ハ  | 不明 |    | 三角 |   |
|        | 39    |     |    | ハ  |    |    | 端a | 三角 | 天 |
|        | 40    | 半円a |    | 特殊 | 人  |    |    | 三角 |   |
| 陳氏 I   | 7     |     |    | 点  | ハ  | 払b | 端b | 曲線 |   |
| 陳氏 I   | 8     |     |    | 点  | ハ  | 払b |    | 曲線 |   |
| 陳氏 II  | 26    | 交差a |    | 点  | 人  | 払a |    | 四角 |   |
| 陳氏 II  | 27    | 交差a |    | 不明 | 人  | 不明 | 中b | 三角 |   |
| 陳氏 II  | 50    | 交差a |    | 点  | 人  | 払a | 中b | 三角 |   |
| 陳氏 II  | 98    | 交差a |    | 点  | 人  | 払a | 中b | 三角 |   |
|        | 25    | 半円a |    | 点  | ハ  | 治b | 端b | 曲線 |   |
| 陳氏 III | 32    | 半円a |    | 斜  | ハ  | 治b | 中a | 曲線 |   |
| 陳氏 III | 32-33 | 不明  |    | 不明 | 不明 | 治b | 中a | 曲線 |   |
| 陳氏 III | 33    |     |    | 点  | ハ  |    | 中a |    |   |
| 陳氏 III | 52    |     |    | 斜  | ハ  | 治b |    | 曲線 |   |
| 陳氏 III | 52-53 | 半円a |    | 斜  | ハ  | 払b |    | 曲線 |   |
| 陳氏 III | 67    | 半円a |    | 斜  | ハ  | 治b | 中a | 曲線 |   |
|        | 58    |     |    | 斜  | ハ  | 治b |    | 曲線 |   |
|        | 59    |     |    | 斜  | ハ  | 治b | 端b | 曲線 |   |
| 陳氏 IV  | 16    |     |    | 斜  | ハ  | 治b | 端b | 曲線 |   |
| 陳氏 IV  | 61    |     | 民  | 斜  | ハ  | 治b | 不明 | 曲線 |   |
| 陳氏 IV  | 82    |     | 民  | 斜  | ハ  | 治b | 端b | 曲線 |   |
| 陳氏 IV  | 東松山鏡  |     | 民  | 斜  | ハ  | 治b | 端b | 曲線 |   |
| 陳氏 V   | 13    |     | 逆  | 斜  | 無  | 治b |    | 曲線 |   |
| 陳氏 V   | 14    |     | 二本 | 斜  | 無  |    |    | 曲線 |   |
| 陳氏 V   | 15    |     | 二本 | 斜  | ハ  |    |    | 曲線 |   |
| 陳氏 V   | 17    | 半円a |    | 斜  | ハ  |    |    | 曲線 | 天 |
|        | 54    | 半円a |    | 斜  | ハ  |    |    | 曲線 | 天 |
|        | 108   | 交差b |    | 斜  | 不明 |    |    | 曲線 | 天 |
| 後張氏    | 53    |     |    | 点  | 人  | 払c |    | 三角 |   |
| 後張氏    | 62    |     |    | 点  | ハ  | 払c |    | 三角 |   |

| 工人 | 目録番号    | 吾・五 | 氏  | 作  | 鏡  | 有  | 母  | 子  | 天  |
|----|---------|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| 天系 | 46      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
| 天系 | 68      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
| 元系 | 69      |     |    |    |    |    |    |    | 元  |
| 元系 | 70      |     |    |    |    |    |    |    | 元  |
| 元系 | 71      |     |    |    |    |    |    |    | 元  |
| 元系 | 74      |     |    |    |    |    |    |    | 元  |
| 元系 | 75      |     |    |    |    |    |    |    | 元  |
| 元系 | 77      |     |    |    |    |    |    |    | 元  |
|    | 9       |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 10      |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 64      |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 78      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 80      |     |    |    |    |    |    |    | 元  |
|    | 81      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 104     |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 105     |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 107     |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 99      |     |    | 不明 | 不明 |    | 端b | 不明 |    |
|    | 100     |     |    | 不明 | 人  | 払a |    | 三角 |    |
|    | 100a    |     |    | 点  | ハ  |    |    |    |    |
|    | 1       |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 11      |     |    | 点  | 不明 |    |    |    |    |
|    | 41      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 43      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 44      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 45      |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 47      |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 48      |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 48-49   |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 51      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 57      |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 60      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 65      |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 66      |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 73      |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 76      |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 91      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 92      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 93      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 94      |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 95      |     |    |    |    |    |    |    | 足長 |
|    | 96      |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 97      |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 98-99   | 交差b |    |    |    | 治c |    |    |    |
|    | 101     | 半円a |    | 斜  | ハ  | 治a |    |    |    |
|    | 102     |     |    |    |    |    | 端b |    | 曲線 |
|    | 103     |     |    |    |    |    |    |    | 曲線 |
|    | 109     |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 110     |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 111     |     |    |    |    |    |    |    |    |
|    | 112     |     |    |    |    |    |    |    | 不明 |
|    | 120-121 |     |    |    |    |    |    |    | 天  |
|    | 136     |     |    | 斜  | 人  |    |    |    |    |
|    | 211     |     | 不明 | 段  |    |    |    |    |    |
|    | 227     | 吾   |    | 斜  |    |    |    |    |    |
|    | 233     |     |    |    |    |    |    |    | 曲線 |

## 路文化史料館 名古屋博物館 (50 音順・敬称略)

## 〔註〕

- 1) 引用文中で用いられる「書体」「字形」等は本論の定義とは異なる。
- 2) 三角縁神獣鏡が同範技法と同型技法のどちらを用いていたのかは議論のあるところではあるが、本論では学史的用語として「同範鏡」を用いる。
- 3) 表現①や表現③とは、岸本が神獣像表現の差から分類した鏡群であり、各鏡群の差が製作者集団の差を示すと考えられている(岸本 1989)。以下、「表現〇」は岸本の定義による。
- 4) 18 鏡と 19 鏡に関しては、銘文のみが書き換えられている。18 鏡は同範鏡の中で京都府北山古墳鏡・奈良県黒塚古墳鏡・滋賀県織部山古墳鏡・岡山県湯迫車塚古墳鏡の 4 面と伝大阪府国分茶白山古墳鏡の 1 面は銘文のみが全て異なるため、今回分析する際は、前者の 4 面を 18 鏡、後者の 1 面を 18' 鏡と名付け、別の鏡として分析する。19 鏡も同範鏡の中で兵庫県森尾古墳鏡 1 面とその他の 4 面とで銘文が異なるが、末尾の数文字のみの改変であり、今回の字形分析にとって支障がないため、全て 19 鏡で統一した。
- 5) 欠損・鋳潰れ・新資料の発見・筆者の数え間違いなどにより文字の採用数は変動するため、実数自体が重要ではなく、その相対的な頻度が問題となる。
- 6) 右側に大きくはらいを行うこと。
- 7) 211 鏡の「氏」は字形が不明瞭で、「氏」でない可能性もあるため、今回の分析対象は 11 面となっている。
- 8) 岸本はこの編年案を後年微修正しているが(福永他 2003)、修正編年案では表現⑦や盤龍鏡群・その他の数面が触れられておらず、張是作鏡の表現⑨は表現⑥と⑦に分散させられ、傘松文の判定にも疑問が残る。修正されたその他の箇所が本論において支障とならないため、修正前を今回は岸本編年として取り上げる。
- 9) 39 鏡に関しては、岸本も編年の際に表現④に含めており(岸本 1995)、下垣も「④(④)」(下垣 2010: 420)として認識している。
- 10) 岸本は兵庫県たつの市発見の 32-33 鏡と共通性が強いものとして「33 鏡」(岸本 2012: 46)を挙げるが、指摘する図像の特徴からして、32 鏡の間違いであろう。
- 11) 表現⑩の 98 鏡は二神二獣鏡であり、且つ点段階から振文座乳を持っていることから、二神二獣鏡群であり振文座乳の初出の可能性のある表現④や⑤(岸本 1989)と表現⑩には関連も想定されるため、どちらの影響もあると考えるのが最も妥当なのかもしれない。
- 12) 54 鏡について、岩本・岸本・車崎は表現⑥でなく表現⑧と考えているが(岩本 2008; 車崎 2017; 福永他 2003)、博山炉右の獣像の横長な顔が表現⑧の 15 鏡の獣像の 1 体と類似していることや、表現⑧の 85 鏡と珍しい鋸歯文の鈕座が共通していることから、表現⑧と考えるべきなのかもしれない。また 108 鏡とは、銘句の類似・鋸歯文の鈕座・博山炉の採用・突出する目玉を持つ獣像などの共通の他、「下」の字形がかなり特殊な形で類似することから、同一工人によるものと言えそうだが、「吾」の字形タイプが異なる。しかし今回実見させていただいた伝奈良県白石光伝寺後方古墳出土の 108 鏡の「吾」は錆による損傷が大きく、確実に異なっているとは言い難く、より残りが良好な文字で確認する必要がある。
- 13) 表現②とされている京都府椿井大塚山古墳出土の 10 鏡も鏡片のみだが、銘文は「天王日月」の「日」のみ見え「天」での判断が付かない。ただ、「日月」を右に書く点や獣文帯の獣像の尾

先が∞の形となる点が表現③の 105 鏡と類似することから、表現③の可能性もある。

## 〔引用文献〕

- 甘木歴史資料館編 2018a 『温故』甘木歴史資料館だより No.59  
 甘木歴史資料館編 2018b 『平成 30 年度甘木歴史資料館夏季企画展 平塚川添遺跡と邪馬台国の時代』企画展示案内  
 安生成美 2013 「漢鏡の書風について：その分類と展開」『書芸術研究』6: 1-14  
 石塚晴通 2012 「漢字字体史研究：序に代えて」石塚晴通編『漢字字体史研究』勉誠出版, 1-11  
 岩本崇 2008 「三角縁神獣鏡の生産とその展開」『考古学雑誌』92(3): 1-51  
 梅原末治 1931 『欧米に於ける支那古鏡』刀江書院  
 大西克也・宮本徹編 2009 『アジアと漢字文化』放送大学教育振興会  
 岡内三眞 1982 「漢代五銖銭の研究」『朝鮮学報』102: 77-110  
 岡村秀典 1999 『三角縁神獣鏡の時代』歴史文化ライブラリー 66, 吉川弘文館  
 岡村秀典 2010 「漢鏡 5 期における淮派の成立」『東方学報』京都 85: 732-762  
 岡村秀典 2017 『鏡が語る古代史』岩波書店  
 角井博監修 2009 『決定版 中国書道史』芸術新聞社  
 笠野毅 1984 「書陵部所蔵古鏡の銘文等について」『書陵部紀要』35: 5-22  
 笠野毅 1993 「中国古鏡銘仮借字一覧表(稿)」『国立歴史民俗博物館研究報告』55: 207-228  
 鐘ヶ江一郎編 2000 『安満宮山古墳』高槻市文化財調査報告書第 21 冊, 高槻市教育委員会  
 岸本直文 1989 「三角縁神獣鏡製作の工人群」『史林』72(5): 1-43  
 岸本直文 1995 「三角縁神獣鏡の編年と前期古墳の新古」考古学研究会編『考古学研究会 40 周年記念論集 展望考古学』109-116  
 岸本直文 2012 「兵庫県たつの市で確認された三角縁神獣鏡の新資料」『考古学雑誌』96(3): 42-49  
 京都大学文学部考古学研究室編 1989 『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』京都大学文学部博物館図録, 京都大学文学部  
 車崎正彦 2017 「東松山市の三角縁神獣鏡」東松山市教育委員会編『市制施行 60 周年記念事業シンポジウム 三角縁神獣鏡と 3～4 世紀の東松山』考古学リーダー 26, 六一書房, 163-174  
 車崎正彦編 2002 『考古資料大観』5 弥生・古墳時代 鏡, 小学館  
 御所市教育委員会編 2001 『鴨都波 1 号墳 調査概報』学生社  
 小林行雄 1979 「三角縁波文帯神獣鏡の研究」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』1: 43-77  
 崎川隆 2002 「書体分析による甲骨文字契刻者組織の復元」『史学』71(2/3): 221-263  
 佐口節司編 2006 『新豊院山遺跡発掘調査報告書Ⅲ 新豊院山古墳群 D 地点の発掘調査』磐田市教育委員会  
 貞廣観山 1988 『講座 中国書道史』  
 佐藤栄作 2016 「字体の定義からみる字体表・字体一覧、字体画像データ」石塚晴通監修・高田智和・馬場基・横山詔一編『漢字字体史研究二：字体と漢字情報』勉誠出版, 22-34  
 澤田秀実 1993 「三角縁神獣鏡の製作動向」『法政考古学』19: 17-37

- 下垣仁志 2010 『三角縁神獣鏡研究事典』吉川弘文館
- 高松市歴史資料館編 1995 『鏡の美：讃岐出土・伝来の和鏡を中心として』第6回企画展
- 辰馬考古資料館編 1989 『考古資料目録』
- 富岡謙哉 1916 「日本出土の支那古鏡」『史林』1(4)：109-128
- 奈良県立橿原考古学研究所編 2006 『3次元デジタルアーカイブ古鏡総覧(Ⅰ)』学生社
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・京都大学・東京新聞編 2000 『大古墳展：ヤマト王権と古墳の鏡』東京新聞
- 新納泉 1991 「権現山鏡群の型式学的位置」近藤義郎編『権現山51号墳』、『権現山51号墳』刊行会、176-185
- 二玄社 2007 『大書源』二玄社
- 西田守夫 1971 「三角縁神獣鏡の型式系譜諸説」『東京国立博物館紀要』6：195-239
- 西田守夫 1980 「竹島御家老屋敷古墳出土の正始元年三角縁階段式神獣鏡と三面の鏡：三角縁神獣鏡の同范関係資料(五)」『MUSEUM』357：32-35
- 日本考古学協会 2010 年度兵庫大会第2分科会 2010 「三角縁神獣鏡地名表」『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会 研究発表資料』日本考古学協会 2010 年度兵庫大会、296-307
- 林裕己 1998 「三角縁神獣鏡の銘文：銘文一覧と若干の考察」『古代』105：49-74
- 樋口隆康 1992 『三角縁神獣鏡綜鑑』新潮社
- 樋口隆康 2000 『三角縁神獣鏡新鑑』学生社
- 福宿孝夫 1991 「日本出土『魏紀年』四鏡の銘文と字体」『書学書道史研究』1：16-29
- 福宿孝夫 1994 「三角縁神獣鏡の新探究：銘文と刻紋に基づく地理的特質」『宮崎大学教育学部紀要』人文科学 75：1-30
- 福永伸哉 1992 「規矩境における特異な一群：三角縁神獣鏡との関連をめぐって」埋蔵文化財研究会編『究班：埋蔵文化財研究会 15 周年記念論文集』249-256
- 福永伸哉 2005 『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉・岡村秀典・岸本直文・車崎正彦・小山田宏一・森下章司 2003 『シンポジウム 三角縁神獣鏡』学生社
- 福永伸哉・森下章司 2000 「河北省出土の魏晉鏡」『史林』83(1)：123-139
- 福永伸哉・杉井健編 1996 『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会
- 福山敏男 1974 「景初三年・正始元年三角縁神獣鏡銘の陳氏と杜地」『古代文化』26(11)：3-11
- 藤田淳編 2008 『“おかえり”故郷へ 発掘された兵庫の遺宝』兵庫県立考古博物館開館記念展Ⅱ、兵庫県立考古博物館
- 藤丸詔八郎 2002 「陳是作銘三角縁4神4獣鏡(伝上野国出土)の紹介」『北九州市立考古博物館研究紀要』8：1-13
- 水野敏典 2017 「三次元計測からみた高坂古墳出土の三角縁神獣鏡」東松山市教育委員会編『市制施行60周年記念事業シンポジウム 三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山』考古学リーダー26、六一書房、133-141
- 水野敏典・奥山誠義 2012 「三次元計測を応用した挽型から見た三角縁神獣鏡の製作技術の研究」『日本考古学協会第78回総会研究発表要旨』日本考古学協会第78回総会、44-45
- 水野敏典編 2010 『考古資料における三次元デジタルアーカイブの活用と展開』平成18年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究A)研究成果報告書
- 水野敏典編 2017 『三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獣鏡の総合的研究』平成25年度～平成28年度科学

研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書

- 森浩一編 1990 『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告 第6冊、同志社大学文学部文化学科内考古学研究室
- 森將軍塚古墳発掘調査団編 1992 『史跡 森將軍塚古墳：保存整備事業発掘調査報告書』更埴市教育委員会

#### [図表出典]

- 図1 1 佐味田宝塚61鏡：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
2 正始石経：二玄社2007  
3 孔宙碑：二玄社2007  
4 顔師古等慈寺碑：二玄社2007
- 図2 17 伝国分茶白山：樋口2000  
22 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018b  
23 コヤダニ：筆者撮影(洲本市立淡路文化史料館蔵)  
25 西求女塚(3号鏡)/26 椿井大塚山(M31)/28 椿井大塚山/29 佐味田宝塚/32 新山/35 西求女塚/36 吉島/36-37 黒塚(31号鏡)/37 佐味田宝塚/40 黒塚/52-53 黒塚(11号鏡)/67 黒塚/101 松林山/233 谷口：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
27 伝宇佐付近：辰馬考古資料館編1989  
29-30 安満宮山：鐘ヶ江編2000  
30 伝富雄丸山：水野編2017  
50 新豊院山D2：佐口編2006  
54 園部垣内：森編1990  
98 伝富雄丸山：水野編2010  
98-99 鴨都波1号：御所市教育委員会編2001  
108 伝白石光伝寺：筆者撮影(名古屋博物館蔵)
- 図3 筆者作成
- 図4 6 宮ノ洲/32 新山/52-53 黒塚(11号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
23 左 コヤダニ：筆者撮影(洲本市立淡路文化史料館蔵)  
右 黒塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図5 6 宮ノ洲/13 湯迫車塚/14 湯迫車塚/15 大岩山/21 出土地不明(泉屋博物館蔵SM24)/34 黒塚/61 佐味田宝塚/79 黒塚(32号鏡)/82 古富波山：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
227 御旅山：筆者撮影(大阪府立近つ飛鳥博物館蔵)  
東松山鏡：水野編2017
- 図6 筆者作成
- 図7 6 宮ノ洲/8 森尾/11 宮ノ洲/13 銚子塚/14 湯迫車塚/15 大岩山/16 湯迫車塚/18 黒塚/19 森尾/21 出土地不明(泉屋博物館蔵SM24)/25 西求女塚(3号鏡)/26 椿井大塚山(M31)/29 佐味田宝塚/32 新山/33 黒塚/35 椿井大塚山(M7)/36 吉島/36-37 黒塚(31号鏡)/37 佐味田宝塚/40 黒塚/52 黒塚/52-53 黒塚(25号鏡)/53 椿井大塚山/59 西求女塚/61 佐味田宝塚/62 黒塚/67 黒塚/79 黒塚(20号鏡)/82 古富波山/101 松林山/233 谷口：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
7 神原神社/30 伝富雄丸山/東松山鏡：水野編2017  
17 伝国分茶白山/20 伝長岡付近/58 妙法寺2号/136阿保親王塚4号鏡：樋口2000  
18 伝国分茶白山：樋口1992  
22 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018b  
23 コヤダニ：筆者撮影(洲本市立淡路文化史料館蔵)  
27 伝宇佐付近：辰馬考古資料館編1989

- 28 椿井大塚山：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・京都大学・東京新聞編 2000
- 29-30 安満宮山：鐘ヶ江編2000
- 50 新豊院山D2：佐口編2006
- 54 園部垣内：森編1990
- 98 伝富雄丸山：水野編2010
- 100a 出土地不明(東京国立博物館蔵)：車崎編 2002
- 108 伝白石光伝寺：筆者撮影(名古屋博物館蔵)
- 図8 筆者作成
- 図9 6 宮ノ洲/8 蟹沢/13 銚子塚/14 湯迫車塚/15 大岩山/16 真土大塚山/18 黒塚/19 佐味田宝塚/21 椿井大塚山/25 西求女塚(3号鏡)/26 椿井大塚山(M31)/31 湯迫車塚/32 新山/34 黒塚/35 西求女塚/36 吉島/36-37 黒塚(31号鏡)/37 佐味田宝塚/40 芝ヶ原11号/52 黒塚/52-53 黒塚(11号鏡)/53 黒塚(13号鏡)/61 佐味田宝塚/62 黒塚/67 黒塚/79 黒塚(32号鏡)/82 古富波山/100 新山/101 松林山/233 谷口：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 7 神原神社/30 伝富雄丸山/33 伝岡山県/東松山鏡：水野編2017
- 17 伝国分茶臼山/58 妙法寺2号/136阿保親王塚：樋口2000
- 18” 伝国分茶臼山：樋口1992
- 23 コヤダニ：筆者撮影(洲本市立淡路文化史料館蔵)
- 27 伝宇佐付近：辰馬考古資料館編1989
- 39 出土地不明(フーリア美術館蔵)：梅原1931
- 50 庭鳥塚/98 伝富雄丸山/120-121 塩田北山東：水野編2010
- 54 園部垣内：森編1990
- 59 牛谷天神山：藤田編2008
- 100a 出土地不明(東京国立博物館蔵)：車崎編 2002
- 図10 筆者作成
- 図11 23右 黒塚/53 黒塚(13号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 23左 コヤダニ：筆者撮影(洲本市立淡路文化史料館蔵)
- 39 出土地不明(フーリア美術館蔵)：梅原1931
- 40 左 黒塚/右 芝ヶ原11号：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図12 8 蟹沢/13 湯迫車塚/16 湯迫車塚/19 森尾/21 椿井大塚山/25 椿井大塚山/26 椿井大塚山(M31)/31 湯迫車塚/32 新山/34 黒塚/52-53 黒塚(11号鏡)/53 黒塚(13号鏡)/61 佐味田宝塚/62 宮谷/67 黒塚/82 古富波山/100 新山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 7 神原神社/30 伝富雄丸山/東松山鏡：水野編2017
- 18” 伝国分茶臼山：樋口1992
- 22 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018a
- 29-30 安満宮山：鐘ヶ江編2000
- 32-33 伝たつの市：岸本2012
- 50 庭鳥塚/98 伝富雄丸山：水野編2010
- 52 伝三本木：藤丸2002
- 58 妙法寺2号/97 普段寺1号：樋口2000
- 59 牛谷天神山：藤田編2008
- 図13 筆者作成
- 図14 26 椿井大塚山(M31)/34 黒塚/82 古富波山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図15 32 新山/62 宮谷：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図16 16 真土大塚山/25 西求女塚(10号鏡)/29 佐味田宝塚/31 湯迫車塚/32 新山/33 黒塚/67 黒塚/82 古富波山/101 松林山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 7 神原神社/東松山鏡：水野編2017
- 18” 伝国分茶臼山：樋口1992
- 27 伝宇佐付近：辰馬考古資料館編1989
- 29-30 安満宮山：鐘ヶ江編2000
- 32-33 伝たつの市：岸本2012
- 39 雪野山：福永・杉井編1996
- 50 新豊院山D2：佐口編2006
- 59 牛谷天神山：藤田編2008
- 98 伝富雄丸山：水野編2010
- 図17 筆者作成
- 図18 8 蟹沢/13 銚子塚/14 湯迫車塚/15 大岩山/16 真土大塚山/18 黒塚/19 佐味田宝塚/21 椿井大塚山/23上平川大塚/25 西求女塚(3号鏡)/26 椿井大塚山(M31)/31 湯迫車塚/32 新山/34 黒塚/35 椿井大塚山(M7)/36 吉島/36-37 黒塚(31号鏡)/37 佐味田宝塚/40 芝ヶ原11号/52-53 黒塚(11号鏡)/53 黒塚(13号鏡)/61 佐味田宝塚/62 黒塚/67 黒塚/79 黒塚(32号鏡)/82 古富波山/100 新山/101 松林山/102 原口：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 7 神原神社/30 伝富雄丸山/東松山鏡：水野編2017
- 17 伝国分茶臼山/58 妙法寺2号：樋口2000
- 18” 伝国分茶臼山/52 伝三本木：樋口1992
- 22 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018a
- 27 伝宇佐付近：辰馬考古資料館編1989
- 29-30 安満宮山：鐘ヶ江編2000
- 32-33 伝たつの市：岸本2012
- 39 出土地不明(フーリア美術館蔵)：梅原1931
- 50 新豊院山D2：佐口編2006
- 54 園部垣内：森編1990
- 59 牛谷天神山：藤田編2008
- 98 伝香川県：高松市歴史資料館編1995
- 98-99 鴨都波1号：御所市教育委員会編2001
- 108 伝白石光伝寺：筆者撮影(名古屋博物館蔵)
- 図19 筆者作成
- 図20 30 伝富雄丸山：水野編2017
- 101 松林山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図21 6 宮ノ洲/9 上平川大塚/21 出土地不明(泉屋博物館蔵 SM23)/29 佐味田宝塚/31 湯迫車塚/35 椿井大塚山(M7)/36 吉島/41 久津川車塚/43 黒塚/44吉島/46 椿井大塚山(M13)/60 黒塚/68 椿井大塚山/69 椿井大塚山/70 黒塚(30号鏡)/71 新山/74 新山/75 椿井大塚山/77 久津川箱塚/80 長法寺南原/81椿井大塚山/91 宮ノ洲/92 椿井大塚山/93 長法寺南原/94 室大墓/95 金崎/104 筒野1号/105 石塚山(2号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 17 伝国分茶臼山/51 郷観音山/109 伝祇園山：樋口2000
- 23 コヤダニ：筆者撮影(洲本市立淡路文化史料館蔵)
- 30 伝富雄丸山：水野編2017
- 39 出土地不明(フーリア美術館蔵)：梅原1931
- 54 園部垣内：森編1990

- 78 森將軍塚：森將軍塚古墳発掘調査団編1992  
108 伝白石光伝寺：筆者撮影(名古屋市博物館蔵)
- 図22 筆者作成
- 図23 元類 70 黒塚(29号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
天類 68 椿井大塚山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図24 隸書 憲平石経/楷書 柳公権金剛經刻石：二玄社2007より筆者作成
- 図25 29-30 安満宮山：鐘ヶ江編2000  
30 伝富雄丸山：水野編2017/31 湯迫車塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図26 21 「氏」「作」 出土地不明(泉屋博古館蔵SM24)/21「鏡」「有」「子」「兮」 椿井大塚山/21「天」 出土地不明(泉屋博古館蔵SM23)/34鏡 黒塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
22 「吾」「作」「兮」 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018b  
22 「有」「子」 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018a
- 図27 35 「吾」「鏡」「有」 西求女塚/35「作」「子」「天」 椿井大塚山(M7)/35「上」「記号」 石塚山/36 吉島：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図28 23 コヤダニ：筆者撮影(洲本市立淡路文化史料館蔵)  
28 「吾」「鏡」 椿井大塚山/37 佐味田宝塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
28 「作」「子」 椿井大塚山：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・京都大学・東京新聞編 2000
- 図29 18 黒塚/19「作」「有」「徐州」 森尾/19「鏡」「子」 佐味田宝塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
18” 伝国分茶臼山/20 長岡近郊伝：樋口1992
- 図30 6 宮ノ洲/79「氏」「鏡」「子」 黒塚(32号鏡)/79「作」 黒塚(20号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図31 7 神原神社/8「作」 森尾/8「鏡」「有」「子」「年号」 蟹沢：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図32 26 椿井大塚山(M30)：奈良県立橿原考古学研究所編 2006  
27 伝宇佐付近：辰馬考古資料館編1989  
50 「吾」「作」「母」「子」 新豊院山D2：佐口編2006  
50 「鏡」「有」 庭鳥塚/98「吾」「作」「鏡」「有」「母」 伝富雄丸山：水野編2010  
98「子」 伝香川県：高松市歴史資料館編1995
- 図33 32 新山/33「作」「母」 黒塚/52「作」「鏡」「口巨衝」「兮」 黒塚/52-53「吾」「鏡」「有」「子」 黒塚(11号鏡)/52-53「作」「兮」 黒塚(25号鏡)/67 黒塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
32-33 伝たつの市：岸本2012  
33 「鏡」 伝岡山県：水野編2017  
52 「有」 伝三本木：藤丸2002  
52 「子」 伝三本木：樋口1992
- 図34 16 「作」「有」 湯迫車塚/16「鏡」「母」「子」 真土大塚山/61 佐味田宝塚/82 古富波山：奈良県立橿原考古学研究所編 2006  
東松山鏡：水野編2017
- 図35 13 「氏」「有」「用青同」 湯迫車塚/13「作」「鏡」「子」 銚子塚/14 湯迫車塚/15 大岩山：奈良県立橿原考古学研究所編 2006  
17 伝国分茶臼山：樋口2000
- 図36 53 「作」 椿井大塚山/53「鏡」「有」「子」 黒塚(13号鏡)/62 「作」「鏡」「子」 黒塚/62「有」 宮谷：奈良県立橿原考古学研究所編 2006
- 図37 46 椿井大塚山(M13)/68 椿井大塚山：奈良県立橿原考古学研究所編 2006
- 図38 69 椿井大塚山/70 黒塚(30号鏡)/71 新山/74 新山/75 椿井大塚山/77 久津川箱塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図39 34 黒塚/35 西求女塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図40 21 黒塚(16号鏡)/29-30 安満宮山/31 湯迫車塚/34 黒塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
22 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018b  
30 伝富雄丸山：水野編2017
- 図41 21 黒塚(16号鏡)/29-30 安満宮山/31 湯迫車塚/34 黒塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
22 伝大願寺塚：甘木歴史資料館編2018b  
30 伝富雄丸山：水野編2017
- 図42 21 黒塚(16号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
30 伝富雄丸山：水野編2017
- 図43 18 織部山/19 森尾/37 西求女塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
20 伝長岡付近：樋口2000
- 図44 37 佐味田宝塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
39 出土地不明(フリーア美術館蔵)：梅原1931
- 図45 39図像 出土地不明(フリーア美術館蔵)：梅原1931  
39「右」 雪野山：福永・杉井編1996  
40 黒塚10号鏡：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図46 52 黒塚/52-53 黒塚(11号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図47 25 西求女塚(3号鏡)/26 椿井大塚山(M31)：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図48 26 椿井大塚山(M31)/67 西求女塚/82 古富波山：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
98 伝富雄丸山：水野編2010
- 図49 32 新山/33 黒塚/44 佐味田宝塚/52 黒塚/52-53 黒塚(11号鏡)/67 黒塚：奈良県立橿原考古学研究所編 2006  
32-33 伝たつの市：岸本2012  
50 庭鳥塚：水野編2010
- 図50 58 妙法寺2号：樋口2000  
61 佐味田宝塚/82 古富波山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図51 25 椿井大塚山/61 佐味田宝塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
59 牛谷天神山：藤田編2008
- 図52 16 湯迫車塚/61 佐味田宝塚/82 古富波山：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
東松山鏡：水野編2017
- 図53 61 佐味田宝塚/神人龍虎画像鏡 黒塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
東松山鏡：水野編2017
- 図54 16 湯迫車塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
東松山鏡：水野編2017
- 図55 16 湯迫車塚/82 古富波山：奈良県立橿原考古学研究所編 2006
- 図56 82 古富波山/87 山神：奈良県立橿原考古学研究所編2006  
東松山鏡：水野編2017
- 図57 13 湯迫車塚/14 湯迫車塚/15 大岩山：奈良県立橿原考

- 古学研究所編2006
- 図58 13 銚子塚/14 湯迫車塚/15 大岩山/93 長法寺南原：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 17 伝国分茶臼山：樋口2000
- 図59 13 銚子塚/14 湯迫車塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 91 沖ノ島18号：水野編2010
- 図60 筆者作成
- 図61 46 椿井大塚山(M13)/68 椿井大塚山/69 椿井大塚山/70 御陵/71 新山/74 新山/75 椿井大塚山/77 久津川箱塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図62 46 椿井大塚山(M13)/68 椿井大塚山/69 椿井大塚山/70 御陵/71 新山/74 新山/75 椿井大塚山/77 久津川箱塚：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図63 9 上平川大塚/29-30 安満宮山/68 椿井大塚山/69 椿井大塚山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 30 伝富雄丸山：水野編2017
- 図64 62 黒塚/64 前橋天神山：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図65 78 森將軍塚：森將軍塚古墳発掘調査団編1992
- 図66 80 長法寺南原/105 石塚山(1号鏡)：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 図67 80右上・左上・右下 椿井大塚山/80左下 長法寺南原：奈良県立橿原考古学研究所編2006
- 表1～2、4～19 筆者作成
- 表3 二玄社2007より筆者作成

## **The analysis of character shapes of inscriptions on mirrors with triangular rims and designs of divinities and animals**

### **-chronology and craftsmen-**

Kensho AMEMIYA

Mirrors with triangular rims and designs of divinities and animals have been studied for a long time because of their importance, but identification of individuals of their craftsmen has not been developed and their chronologies have many vague points. In this article, I supposed that the difference of character shapes of their inscriptions, which have been rarely emphasized, reflects the difference of craftsmen and periods, so I analyzed shapes of frequently used characters.

As a result, changes of the character shape types of “ 作 ” divided the transition of these mirrors into two stages and changes of the shape types of the other characters identified 14 craftsmen. The new chronology could subdivide existing chronologies and modify them. Regarding craftsmen, mirrors of each craftsman have common points in design expression and other elements and connections between craftsmen were found in character shapes and design expression.